

大阪府内地域連携プラットフォーム  
2023（令和5）年度 新入生対象 薬物に関する意識調査  
（共同 IR 実施報告）

1. 調査の目的	1
2. 調査の概要	1
3. 調査の結果	7

2023(令和5)年9月

大阪府内地域連携プラットフォーム



## 1. 調査の目的

近年、スマートフォンの急速な普及に伴い、インターネットやソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）を通じて大学生が大麻などの違法薬物に接しやすい状況が生じている。

当コンソーシアムでは、各地で大学生の違法薬物所持や乱用による逮捕者が相次ぐ状況を重く受け止め、大学の使命として学生に健康で充実した大学生活を保障するとともに、安全で安心な社会の実現のために、複数大学が連携して社会的意義のある啓発活動に取り組むため、2020（令和2）年5月に開催した総会において会員大学の新生を対象とした薬物乱用防止に関するアンケート調査を実施することを決定し、今回3回目の調査となる。

大学生の薬物に対する意識の実態把握はもとより、調査を通じて新しく大学生活を始めるとともに新生に薬物乱用防止の啓発を一層促進することを目的に本調査を実施する。

## 2. 調査の概要

### (1) 調査対象者

令和5年度に会員大学（大阪府内地域連携プラットフォーム形成大学）に入学した学生

### (2) 調査実施方法

- ①各大学において、新生ガイダンス等で新生に周知用チラシを配布、回答を指示
  - ②学生が各自パソコン、スマートフォン等にて、大学コンソーシアム大阪のホームページのアンケートフォームにアクセスし回答
- なお、関西大学は大学独自に調査を実施し、その集計結果を加えて計上している。  
(ただし、性別及びその他の記述項目は除く。)

### (3) 調査実施期間

令和5年4月1日（土）～5月6日（土）

### (4) 調査主体

特定非営利活動法人 大学コンソーシアム大阪

### (5) 調査の内容

調査の内容は、次の20問23項目である。なお、☆印を付した選択肢は、前回調査から追加・削除した。

また、今回調査では性別を問う設問を追加した。「その他」の回答者が少ないため、数値は掲載するが、コメントからは除外している。

1. あなたは、薬物乱用問題について関心がありますか。(1つ選択)	
1	非常に関心がある
2	ある程度関心がある
3	どちらともいえない
4	あまり関心がない
5	ほとんど関心がない

2. あなたは、以下の薬物の名前を知っていますか。(複数選択可)	
1	有機溶剤(シンナー、トルエンなど)
2	覚せい剤(シャブ、スピード、エスなど)
3	大麻(マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど)
4	コカイン(コーク、スノウ、クラックなど)
5	あへん類(ヘロインなど)
6	LSD(アシッド、フェニックス、ドラゴンなど)
7	MDMA(エクスタシーなど)
8	いわゆる危険ドラッグ(脱法ハーブなど)
9	知っているものはない

【次の質問以降は質問2であげた薬物についてお聞きします。】	
3. あなたは、これらの薬物についてどのような印象を持っていますか。(複数選択可)	
1	かっこいい
2	気持ち良くなれる気がする
3	ダイエットに効果がある
4	眠気覚ましに効果がある
5	1回使うくらいであれば、心や体への害はない
6	心や体に害がある
7	犯罪に巻き込まれる
8	使ったり、持っていたりするの悪いことだ
9	1回でも使うと止められなくなる
10	人に渡したり、人からもらうことも悪いことだ
11	特にない
12	わからない

4. あなたは、これらの薬物を使ったり、持っていたりした場合、また、他人に譲渡したり、譲渡された場合、どうなると思いますか。(1つ選択)	
1	罰せられる
2	罰せられるものもある
3	1回くらいなら、罰せられることはない
4	罰せられることはない
5	わからない

5. あなたは、これらの薬物について学んだり聞いたりしたことがありましたか。(どちらかを選択)	
1	あった
2	なかった

6. あなたは、薬物を使った場合、以下のようになることがあるのを知っていましたか。 (複数選択可)	
1	現実と幻想との区別がつかなくなり、意識が異様になることがある
2	わけもなく怯えたり(妄想気分)、意識がおかしくなり、奇妙な動作・行動をとることがある
3	自分の行動に干渉する声が聞こえる(幻聴)ことがある
4	何事にも関心が持てず、結果的に学校や職場を欠席しがちで、どんな仕事に就いても、長続きしなくなる
5	依存性があり、意思の力ではなかなかやめることができない
6	知らなかった

7. あなたは、これらの薬物について何から情報を得ましたか。(複数選択可)	
1	小学校の授業
2	中学校の授業
3	高校の授業
4	大学が配布しているリーフレット等
5	大学での啓発ビデオ
6	大学での講演会
7	友達、仲間、先輩、後輩
8	家族
9	ポスター、パンフレット
10	本、雑誌
11	新聞
12	テレビ
13	ラジオ
14	インターネット(☆選択肢「携帯電話」を削除)
15	SNS
16	その他

8. あなたは、これらの薬物を使うことの怖さ(有害性、危険性)をもっと知りたいですか。(1つ選択)	
1	知りたい
2	知りたいとは思わない
3	どちらでもない

9. あなたは、これらの薬物を使った場合の害について学ぶとしたらどこがよいと思いますか。(複数選択可)	
1	大学(講演会、ビデオ、リーフレット)
2	家庭
3	地域活動、自治体等の広報誌
4	図書館、公民館
5	保健所
6	警察
7	厚生労働省麻薬取締部
8	病院
9	インターネット

9. あなたは、これらの薬物を使った場合の害について学ぶとしたらどこがよいと思いますか。（複数選択可）	
10	講演会、座談会
11	特にない
12	その他

10. あなたは、これらの薬物を使う人が増えているのはどのような理由からだと思いますか。（複数選択可）	
1	薬物が簡単に手に入るようになっている
2	本や雑誌等に薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている
3	SNSやインターネットなどに薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている
4	社会のルールを守ろうとする意識が薄れている
5	薬物を使ってもすべての人が警察に見つかるわけではない
6	簡単にやせられるとか、1回使っただけなら害がないなど、薬物のこわさについての誤った情報が多い
7	薬物の害について学ぶことが少ない
8	友達、仲間、先輩、後輩にすすめられる
9	学校や家庭がおもしろくない
10	わからない
11	その他

11. あなたは、これらの薬物を使うことについてどのように考えていますか。（1つ選択）	
1	どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない
2	1回位なら心や体へ害がないので、使ってもかまわない
3	他人に迷惑をかけないのであれば、使うかどうかは個人の自由である
4	その他（ ）

12. あなたは、これらの薬物が使用されているところを直接見たことがありますか。（テレビ、映画、インターネット、報道等で見たものは除きます）（どちらかを選択）	
1	ない
2	ある

13. あなたは、これらの薬物を使用することや購入することを誘われたり、勧められたりすることが、これまでにありましたか。（1つ選択）	
1	誘われたり、勧められたことはない
2	購入を勧められたことがある
3	使用を誘われたことがある
4	無理やり使わされたことがある
5	わからない

14. あなたは、これらの薬物を使用することを誰かに誘われたら、どのように行動しますか。（複数選択可）	
1	誘った相手が誰であろうと、断る
2	誘った相手によっては、断りきれないかもしれない
3	一回くらいであれば体に害がなさそうなので断らないかもしれない
4	好奇心や面白半分から断らないかもしれない

14. あなたは、これらの薬物を使用することを誰かに誘われたら、どのように行動しますか。（複数選択可）	
5	悩み事があったり、疲れていたりしたら断らないかもしれない
6	わからない
7	その他

15. (ア) あなたの周囲に、これらの薬物を所持したり、使用している（いた）人がいますか。（1つ選択）	
1	いない
2	いる（いた）
3	わからない

【質問 15（ア）で「2 いる（いた）」を選択した人だけお答えください】

15. (イ) どの薬物でしたか。（複数選択可）	
1	有機溶剤（シンナー、トルエンなど）
2	覚せい剤（シャブ、スピード、エスなど）
3	大麻（マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど）
4	コカイン（コーク、スノウ、クラックなど）
5	あへん類（ヘロインなど）
6	LSD（アシッド、フェニックス、ドラゴンなど）
7	MDMA（エクスタシーなど）
8	いわゆる危険ドラッグ（脱法ハーブなど）
9	わからない

16. あなたは、もし友人がこれらの薬物を使用していることを知った場合、どうしますか。（1つ選択）	
1	使用をやめるよう説得する
2	他の人（先生や友人など）に伝える
3	警察に通報する
4	医療機関や保健所等に連絡する
5	個人の自由であるので放っておく
6	わからない
7	その他

17. あなたは、これらの薬物に関する相談窓口があることを知っていますか。（複数選択可）	
1	警察の相談窓口
2	行政機関の相談窓口（精神保健福祉センター等）
3	厚生労働省麻薬取締部の相談窓口
4	医療機関の相談窓口
5	民間の支援団体の相談窓口
6	知らない
7	その他

18. あなたや、あなたのまわりの人がこれらの薬物に手を出さないように注意するために知りたいと思う情報は何か。（複数選択可）	
1	薬物乱用による健康被害情報
2	薬物乱用により引き起こされた事件・事故の事例情報
3	国や地方公共団体の薬物乱用対策情報
4	医療機関や民間支援団体の取り組み情報
5	特になし
6	その他

19. (ア) あなたは、これらの薬物を入手可能と考えますか。（1つ選択）	
1	不可能だ
2	かなり難しい
3	難しいが手に入る
4	手に入る

【19. (ア) で「3 難しいが手に入る」または「4 手に入る」を選択した人だけお答えください】	
19. (イ) 入手可能と考えた理由は何ですか。（複数選択可）	
1	SNSやインターネットで探せば見つけることができるから
2	SNSやインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから
3	☆友人・知人が入手方法を知っていると聞いたことがあるから
4	☆繁華街などの街中等で販売されていることを見聞きしたことがあるから
5	それ以外

【19. (イ) で「3 それ以外」を選択した人だけお答えください】	
19. (ウ) それ以外に入手可能と考えた理由は何ですか。	

20. あなたは、薬事法の一部改正（平成26年4月1日施行）により、危険ドラッグと称される薬物や商品（脱法ハーブ、合法アロマリキッドなど）の多くが、使ったり、持っていたりすると罰則の対象となる薬物になっていることを知っていますか。（どちらかを選択）	
1	知っている
2	知らなかった



### 3. 調査の結果

#### (1) 回答者数

本調査には、会員大学のうち 28 大学の学生、計 17,465 名から回答があった。大学別の回答者は下表のとおりである。

図表 1 会員大学全体の回答者数と所属大学別回答者数

	回答者数	割合 (%)		回答者数	割合 (%)
会員大学全体	17,465	100.00			
回答者所属大学			回答者所属大学		
大阪大学	163	0.93	大阪総合保育大学	0	0.00
大阪教育大学	91	0.52	大阪体育大学	344	1.97
大阪公立大学	137	0.78	大阪電気通信大学	186	1.06
藍野大学	8	0.05	大阪人間科学大学	0	0.00
追手門学院大学	147	0.84	大阪保健医療大学	25	0.14
大阪青山大学	1	0.01	大手前大学	148	0.85
大阪医科薬科大学	62	0.35	関西大学	6,195	35.47
大阪音楽大学	0	0.00	関西福祉科学大学	168	0.96
大阪学院大学	0	0.00	近畿大学	2,294	13.13
大阪観光大学	0	0.00	四條畷学園大学	0	0.00
大阪経済大学	1,660	9.50	四天王寺大学	767	4.39
大阪経済法科大学	0	0.00	摂南大学	1,981	11.34
大阪工業大学	1,738	9.95	千里金蘭大学	8	0.05
大阪国際大学	0	0.00	相愛大学	197	1.13
大阪産業大学	0	0.00	宝塚大学	0	0.00
大阪樟蔭女子大学	427	2.44	梅花女子大学	20	0.11
大阪商業大学	8	0.05	阪南大学	0	0.00
大阪女学院大学	54	0.31	東大阪大学	0	0.00
大阪信愛学院大学	21	0.12	桃山学院大学	237	1.36
大阪成蹊大学	246	1.41	森ノ宮医療大学	120	0.69
			無回答	12	0.07

※性別回答数内訳：男性 6,655 名、女性 4,170 名、その他 54 名、回答しない 391 名  
計 11,270 名（関西大学調査分は除く）

※各選択肢の割合（%）は、小数点第 2 位以下を四捨五入しているため、合計が 100%にならない場合がある（以下の図表も同様）。

## (2) 薬物乱用問題への関心状況

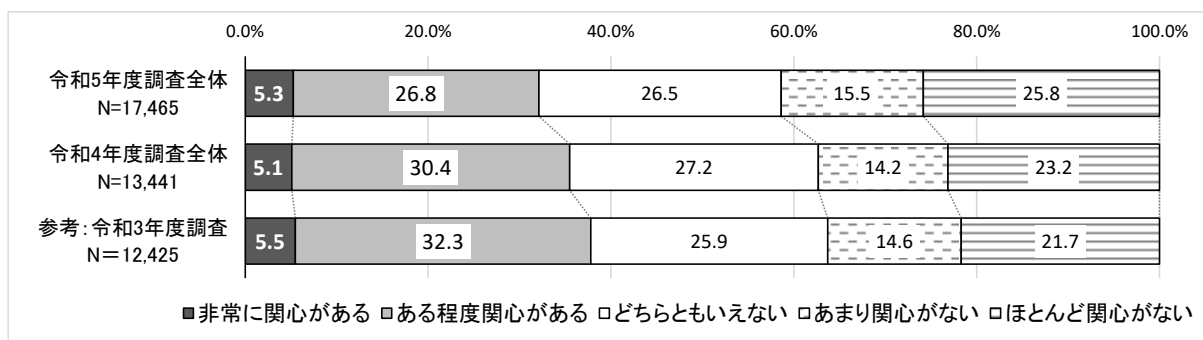
問1 あなたは、薬物乱用問題について関心がありますか。(1つ選択)

薬物乱用問題への関心の状況については、「ある程度関心がある」が26.8%、「どちらともいえない」が26.5%、「ほとんど関心がない」が25.8%となっている。「非常に関心がある」は5.3%と最も少ない。「関心がある(「非常に関心がある」と「ある程度関心がある」の合計)」が32.1%である一方、「関心がない(「あまり関心がない」と「ほとんど関心がない」の合計)」が41.3%となっている。

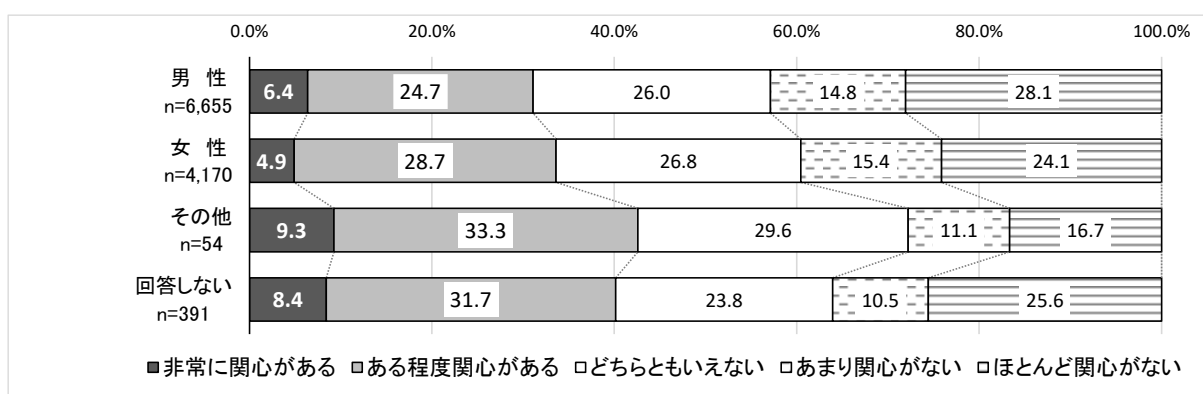
令和4年度調査と比較すると、「関心がある」が減少し、「関心がない」が増えている。

性別にみると、「関心がある」の割合は、「男性」が他に比べて少なく、「性別無回答」が多い。

図表2 薬物乱用問題への関心状況  
 <<令和4年度調査との比較>>



<<性別比較>>



	令和5年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
			n	%	n	%	n	%	n	%		
回答者数	17,465	100.0	6,655	100.0	4,170	100.0	54	100.0	391	100.0	13,441	100.0
非常に関心がある	919	5.3	426	6.4	205	4.9	5	9.3	33	8.4	686	5.1
ある程度関心がある	4,689	26.8	1,644	24.7	1,197	28.7	18	33.3	124	31.7	4,084	30.4
どちらともいえない	4,631	26.5	1,731	26.0	1,119	26.8	16	29.6	93	23.8	3,656	27.2
あまり関心がない	2,713	15.5	986	14.8	643	15.4	6	11.1	41	10.5	1,903	14.2
ほとんど関心がない	4,513	25.8	1,868	28.1	1,006	24.1	9	16.7	100	25.6	3,112	23.2

### (3) 薬物名の認知状況

問2 あなたは、以下の薬物の名前を知っていますか。(複数選択可)

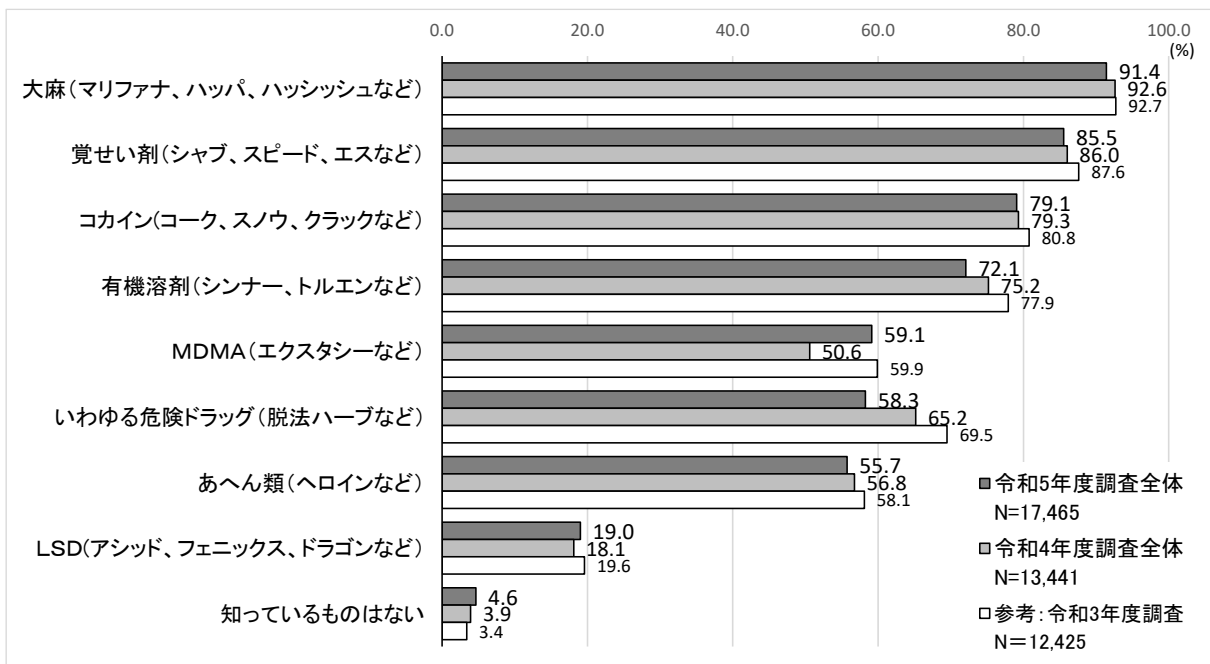
8種類の薬物を提示して、知っている名前をたずねたところ、「大麻(マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど)」が91.4%で最も多く、「覚せい剤(シャブ、スピード、エスなど)」が85.5%、「コカイン(コーク、スノウ、クラックなど)」が79.1%となっている。

「LSD(アシッド、フェニックス、ドラゴンなど)」以外の7種の薬物については、認知度が高い。なお、「知っているものはない」は4.6%と少ない。

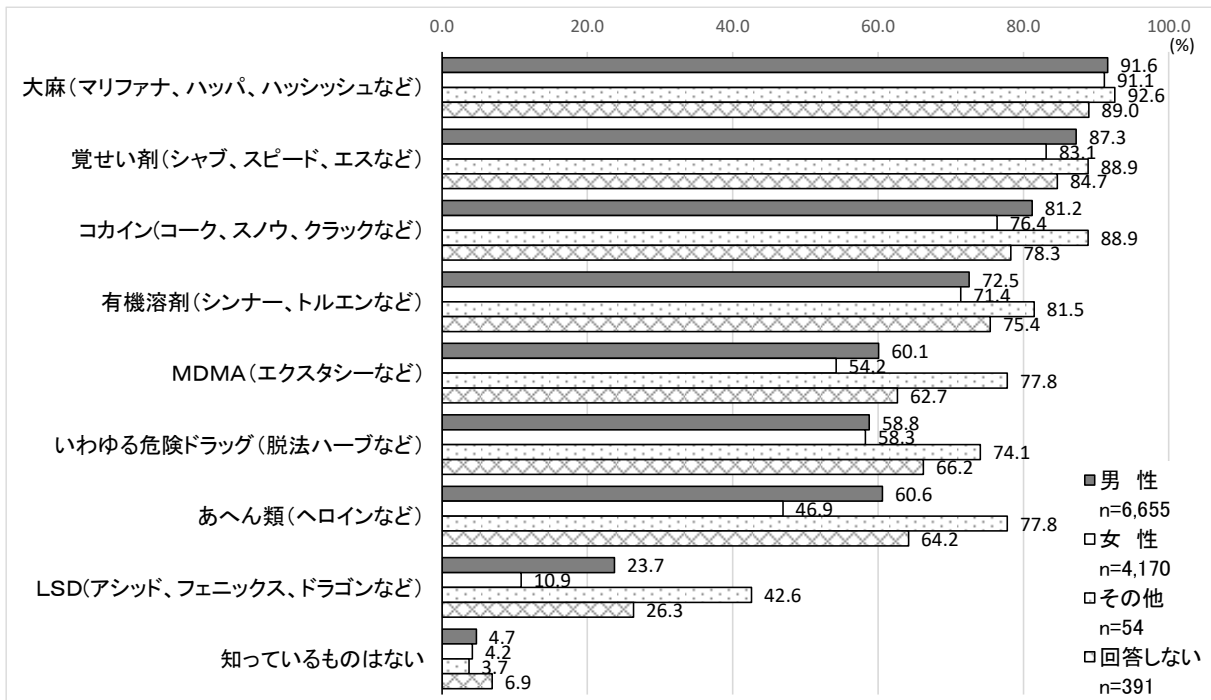
令和4年度調査と比較すると、「MDMA(エクスタシーなど)」の認知割合が8.5ポイント増え、「いわゆる危険ドラッグ(脱法ハーブなど)」が6.9ポイント減っている。

性別にみると、認知している薬物の傾向に差はないが、「女性」の認知度が他に比してやや低いものが多い。

図表3 知っている薬物の名前  
 <<令和4年度調査との比較>>



《性別比較》



(設問順)

	令和5年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査全体	
			男性		女性		その他		回答しない			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	17,465		6,655		4,170		54		391		13,441	
有機溶剤 (シンナー、トルエンなど)	12,586	72.1	4,828	72.5	2,976	71.4	44	81.5	295	75.4	10,107	75.2
覚せい剤 (シャブ、スピード、エスなど)	14,937	85.5	5,808	87.3	3,467	83.1	48	88.9	331	84.7	11,562	86.0
大麻 (マリファナ、ハッパ、ハッシュシュなど)	15,967	91.4	6,096	91.6	3,800	91.1	50	92.6	348	89.0	12,447	92.6
コカイン(コーク、スノウ、クラックなど)	13,812	79.1	5,404	81.2	3,185	76.4	48	88.9	306	78.3	10,663	79.3
あへん類 (ヘロインなど)	9,734	55.7	4,032	60.6	1,956	46.9	42	77.8	251	64.2	7,628	56.8
LSD(アシッド、フェニックス、ドラゴンなど)	3,322	19.0	1,579	23.7	454	10.9	23	42.6	103	26.3	2,435	18.1
MDMA (エクスタシーなど)	10,324	59.1	3,999	60.1	2,262	54.2	42	77.8	245	62.7	6,799	50.6
いわゆる危険ドラッグ (脱法ハーブなど)	10,177	58.3	3,913	58.8	2,430	58.3	40	74.1	259	66.2	8,759	65.2
知っているものはない	811	4.6	314	4.7	174	4.2	2	3.7	27	6.9	526	3.9
累計	91,670		35,973		20,704		339		2,165		70,926	

#### (4) 薬物の印象

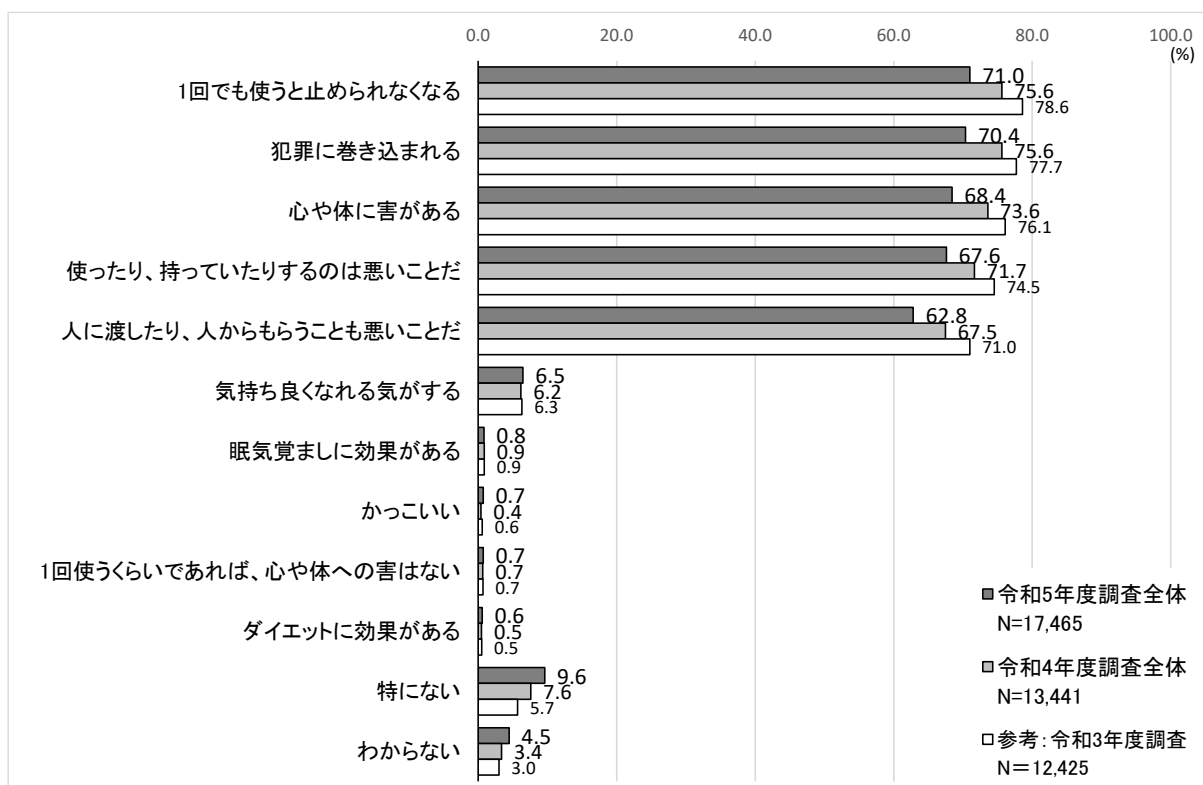
問3 あなたは、質問2であげた薬物についてどのような印象を持っていますか。  
(複数選択可)

質問2で提示した薬物の印象について、7割以上が「1回でも使うと止められなくなる」(71.0%)、「犯罪に巻き込まれる」(70.4%)との印象を持っており、6割以上が「心や体に害がある」(68.4%)、「使ったり、持ったりするのは悪いことだ」(67.6%)、「人に渡したり、人からもらうことも悪いことだ」(62.8%)との印象を持っている。令和4年度調査と比較すると、これらの割合がやや減っている。

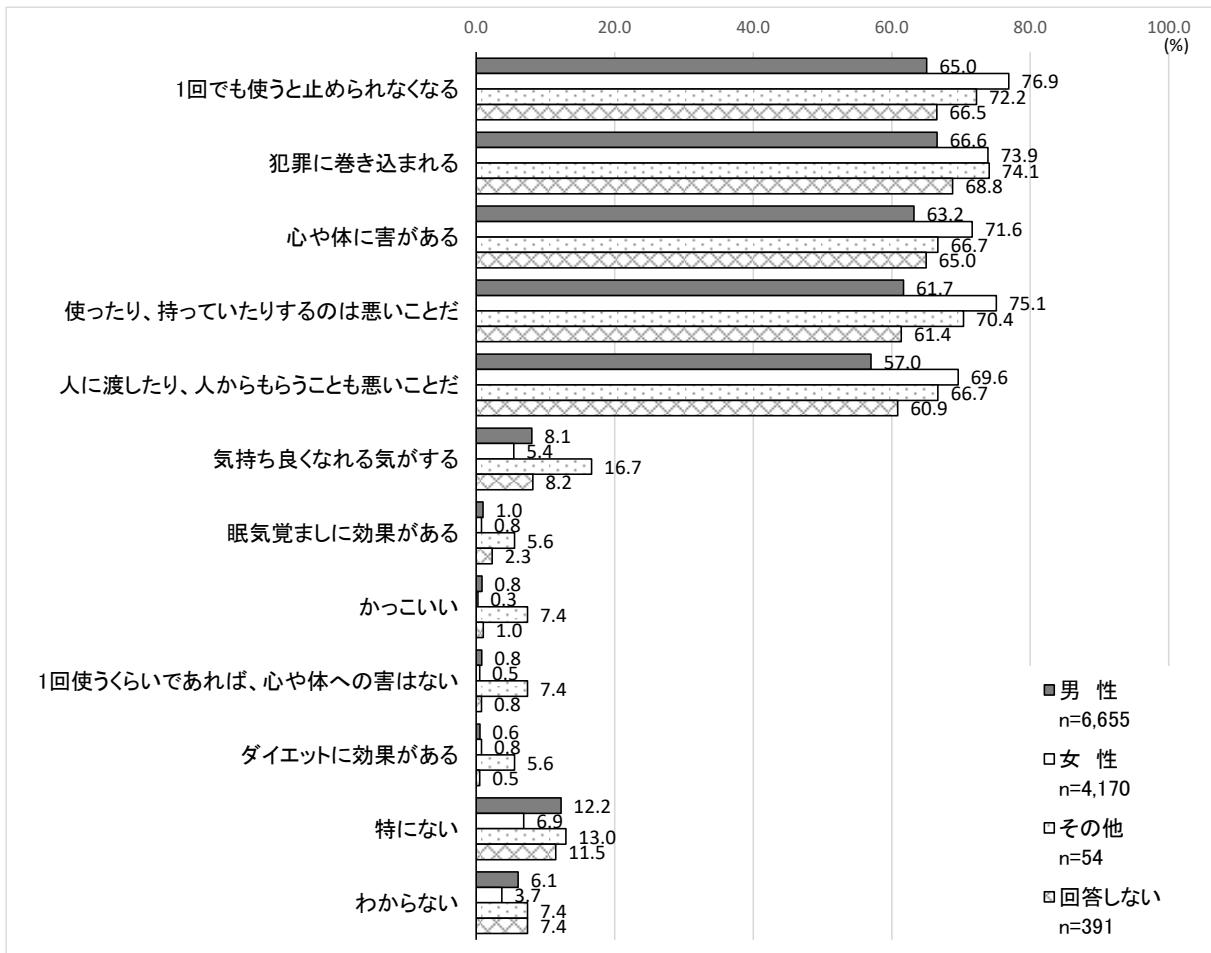
なお、「気持ち良くなれる気がする」、「眠気覚ましに効果がある」、「1回使うくらいであれば、心や体への害はない」、「カッコいい」、「ダイエットに効果がある」といったプラスの印象も、令和4年度調査と同様に、その割合は少ないものの一定数選択されている。

性別にみると、「女性」は他に比べて、「1回でも使うと止められなくなる」などマイナスの印象の割合が多い。

図表4 薬物の印象  
《令和4年度調査との比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和5年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査 全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
			n	%	n	%	n	%	n	%		
回答者数	17,465		6,655		4,170		54		391		13,441	
かっこいい	129	0.7	56	0.8	11	0.3	4	7.4	4	1.0	57	0.4
気持ち良くなれる気がする	1,132	6.5	536	8.1	226	5.4	9	16.7	32	8.2	830	6.2
ダイエットに効果がある	103	0.6	37	0.6	32	0.8	3	5.6	2	0.5	66	0.5
眠気覚ましに効果がある	147	0.8	67	1.0	32	0.8	3	5.6	9	2.3	118	0.9
1回使うくらいであれば、心や体への害はない	130	0.7	55	0.8	21	0.5	4	7.4	3	0.8	91	0.7
心や体に害がある	11,948	68.4	4,207	63.2	2,987	71.6	36	66.7	254	65.0	9,892	73.6
犯罪に巻き込まれる	12,293	70.4	4,429	66.6	3,081	73.9	40	74.1	269	68.8	10,166	75.6
使ったり、持っていたりするのはいきことだ	11,806	67.6	4,106	61.7	3,132	75.1	38	70.4	240	61.4	9,632	71.7
1回でも使うと止められなくなる	12,401	71.0	4,328	65.0	3,207	76.9	39	72.2	260	66.5	10,164	75.6
人に渡したり、人からもらうことも悪いことだ	10,971	62.8	3,795	57.0	2,902	69.6	36	66.7	238	60.9	9,068	67.5
特にない	1,679	9.6	815	12.2	287	6.9	7	13.0	45	11.5	1,021	7.6
わからない	782	4.5	403	6.1	154	3.7	4	7.4	29	7.4	455	3.4
累計	63,521		22,834		16,072		223		1,385		51,560	

(5) 薬物の使用・所持・譲渡への処罰に関する認識

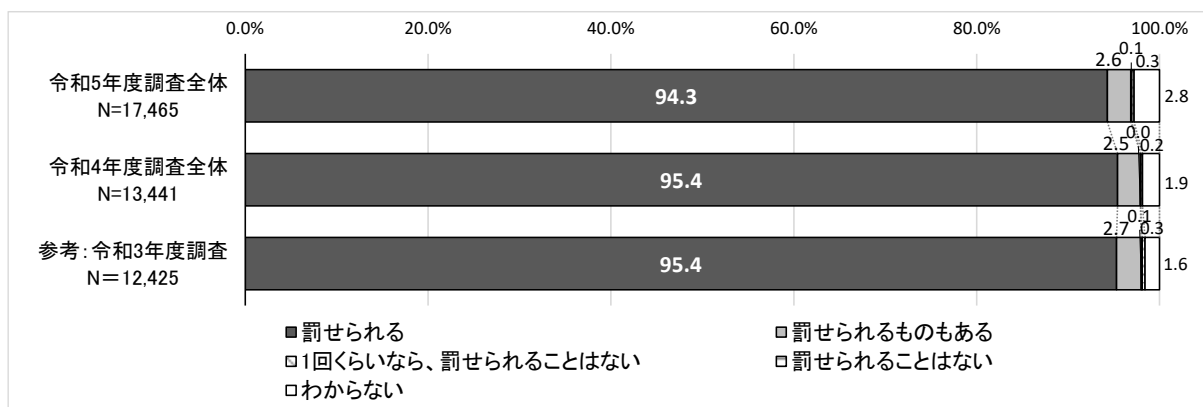
問4 あなたは、これらの薬物を使ったり、持っていたりした場合、また他人に譲渡したり、譲渡された場合、どうなるとお考えですか。(1つ選択)

質問2で提示した薬物を使用したり、所持していたり、他人に譲渡したり、譲渡された場合どうなるかについては、94.3%が「罰せられる」としており、「罰せられるものもある」が2.6%である。「わからない」は2.8%であり、「罰せられることはない(「1回くらいなら」を含む)」とした回答もある。令和4年度調査と同様の結果となっている。

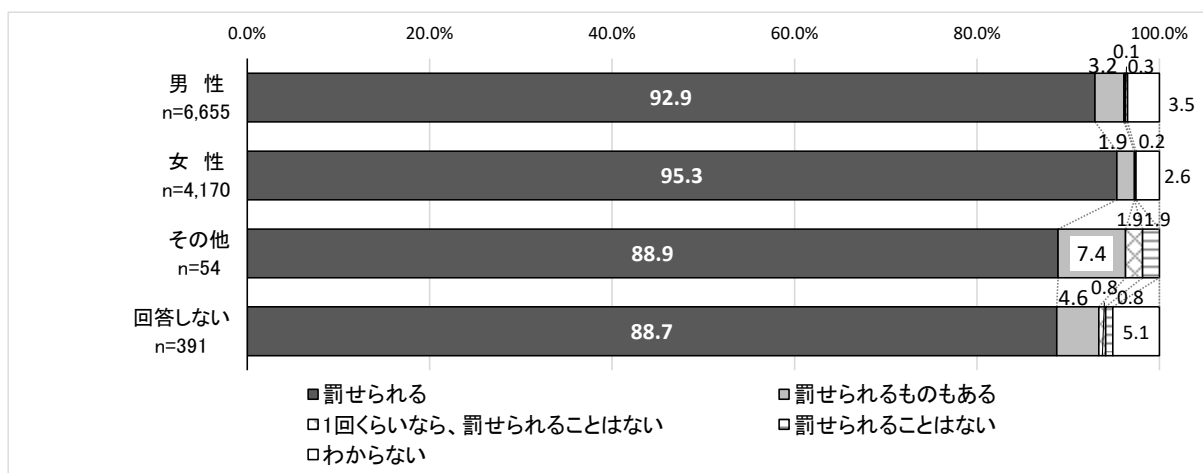
性別にみると、「罰せられる」とした割合は、「女性」が他に比べてやや多い。「わからない」の割合は「性別無回答」がやや多い。

図表5 薬物使用等への処罰に関する認識

《令和4年度調査との比較》



《性別比較》



	令和5年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査 全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
			n	%	n	%	n	%	n	%		
回答者数	17,465	100.0	6,655	100.0	4,170	100.0	54	100.0	391	100.0	13,441	100.0
罰せられる	16,467	94.3	6,185	92.9	3,975	95.3	48	88.9	347	88.7	12,822	95.4
罰せられるものもある	450	2.6	211	3.2	81	1.9	4	7.4	18	4.6	337	2.5
1回くらいなら、罰せられることはない	15	0.1	9	0.1	0	0.0	1	1.9	3	0.8	3	0.0
罰せられることはない	44	0.3	17	0.3	7	0.2	1	1.9	3	0.8	27	0.2
わからない	489	2.8	233	3.5	107	2.6	0	0.0	20	5.1	252	1.9

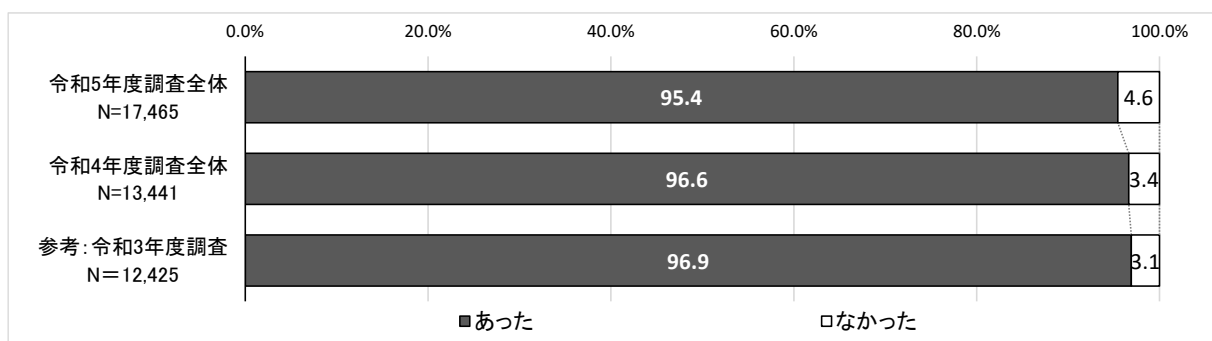
## (6) 薬物についての学習経験の有無

問5 あなたは、これらの薬物について学んだり聞いたりしたことがありますか。  
(どちらかを選択)

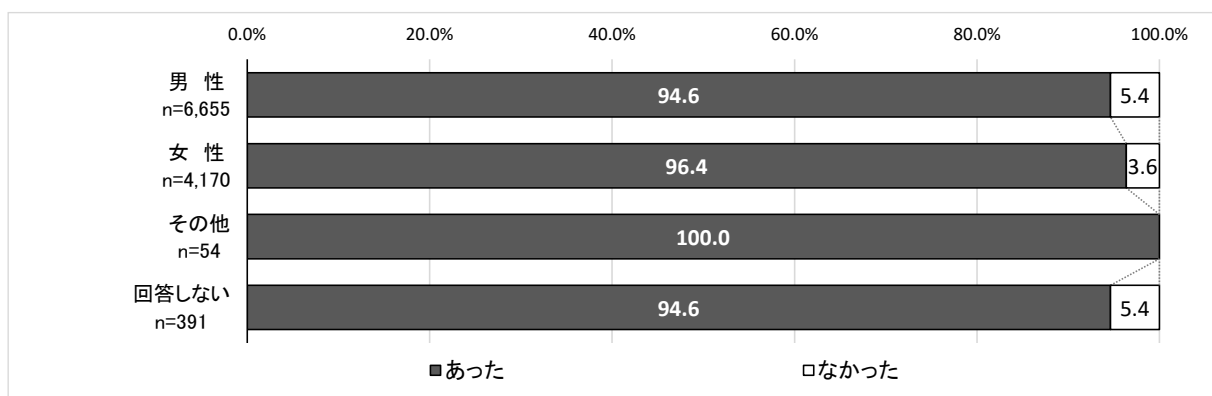
質問2で提示した薬物についてこれまでに学んだり聞いたりしたことがあるかについては、95.4%が「あった」としている。

令和4年度調査と同様の結果となっている。性別にみても差はない。

図表6 薬物についての学習経験の有無  
《令和4年度調査との比較》



《性別比較》





	令和5年度調査		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	17,465	100.0	6,655	100.0	4,170	100.0	54	100.0	391	100.0	13,441	100.0
あった	16,665	95.4	6,298	94.6	4,018	96.4	54	100.0	370	94.6	12,988	96.6
なかった	800	4.6	357	5.4	152	3.6	0	0.0	21	5.4	453	3.4

(7) 薬物使用時の症状に関する認知状況

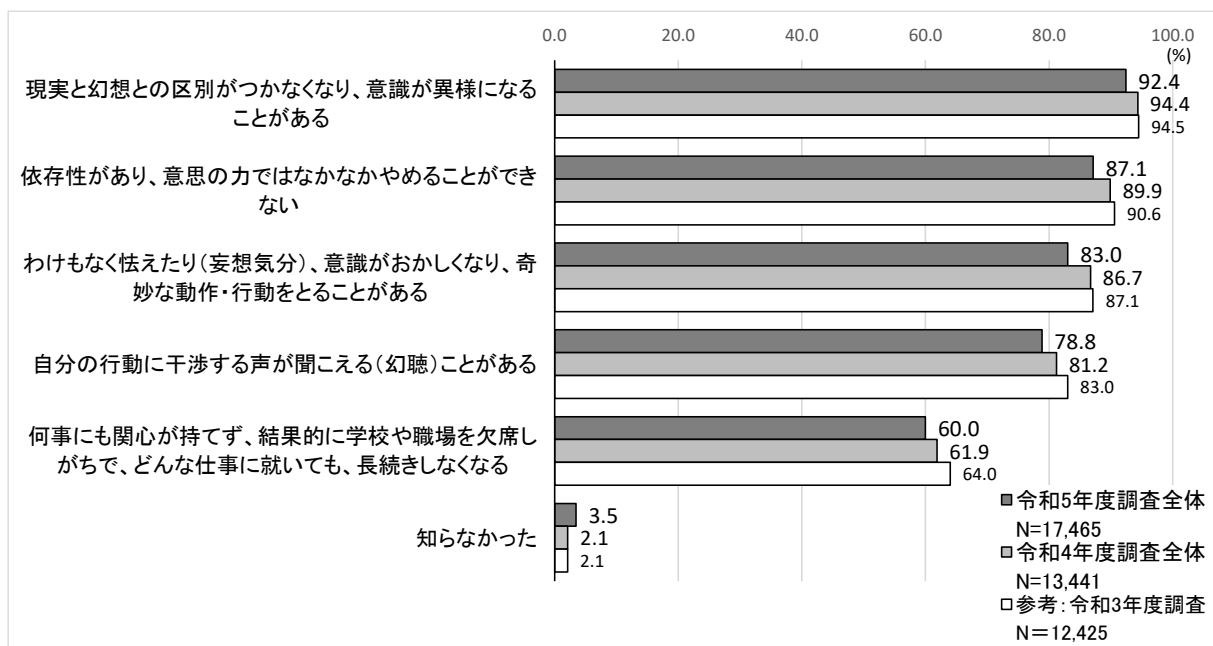
問6 あなたは、薬物を使った場合、以下のようになることがあるのを知っていましたか。(複数選択可)

質問2で提示した薬物の使用時の症状を5つ提示し、このような症状になることの認知状況については、令和4年度調査と同様に、ほとんどの回答者が提示したいずれかの症状を選択し、「知らなかった」は3.5%である。

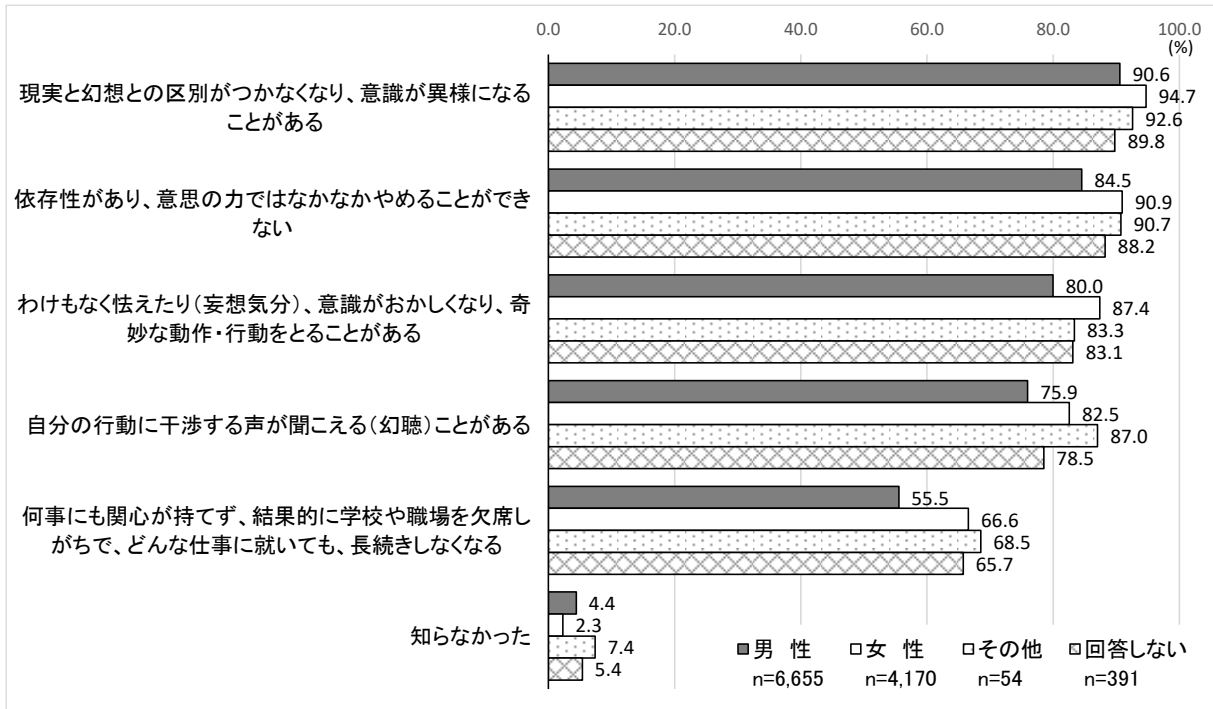
知っている症状としては、8割以上が、「現実と幻想との区別がつかなくなり、意識が異様になることがある」(92.4%)、「依存症があったり、意思の力ではなかなかやめることができない」(87.1%)「わけもなく怯えたり(妄想気分)、意識がおかしくなり、奇妙な動作・行動をとることがある」(83.0%)を選択している。「自分の行動に干渉する声が聞こえる(幻聴)ことがある」(78.8%)、「何事にも関心が持てず、結果的に学校や職場を欠席しがちで、どんな仕事に就いても、長続きしなくなる」(60.0%)の認知度も高い。

性別にみると、使用時の症状の5項目いずれも「男性」は「女性」に比べて、認知度がやや低い。

図表7 薬物使用時の症状に関する認知状況  
 <<令和4年度調査との比較>>



《性別比較》



(設問順)

	令和5年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
回答者数	17,465		6,655		4,170		54		391		13,441	
現実と幻想との区別がつかなくなり、意識が異様になることがある	16,145	92.4	6,027	90.6	3,949	94.7	50	92.6	351	89.8	12,683	94.4
わけもなく怯えたり(妄想気分)、意識がおかしくなり、奇妙な動作・行動をとることがある	14,499	83.0	5,321	80.0	3,643	87.4	45	83.3	325	83.1	11,653	86.7
自分の行動に干渉する声が聞こえる(幻聴)ことがある	13,771	78.8	5,053	75.9	3,442	82.5	47	87.0	307	78.5	10,915	81.2
何事にも関心が持てず、結果的に学校や職場を欠席しがちで、どんな仕事に就いても、長続きしなくなる	10,477	60.0	3,696	55.5	2,776	66.6	37	68.5	257	65.7	8,319	61.9
依存性があり、意思の力ではなかなかやめることができない	15,215	87.1	5,625	84.5	3,792	90.9	49	90.7	345	88.2	12,083	89.9
知らなかった	608	3.5	294	4.4	96	2.3	4	7.4	21	5.4	285	2.1
累計	70,715		26,016		17,698		232		1,606		55,938	

(8) 薬物についての情報源

問7 あなたは、これらの薬物について何から情報を得ましたか。(複数選択可)

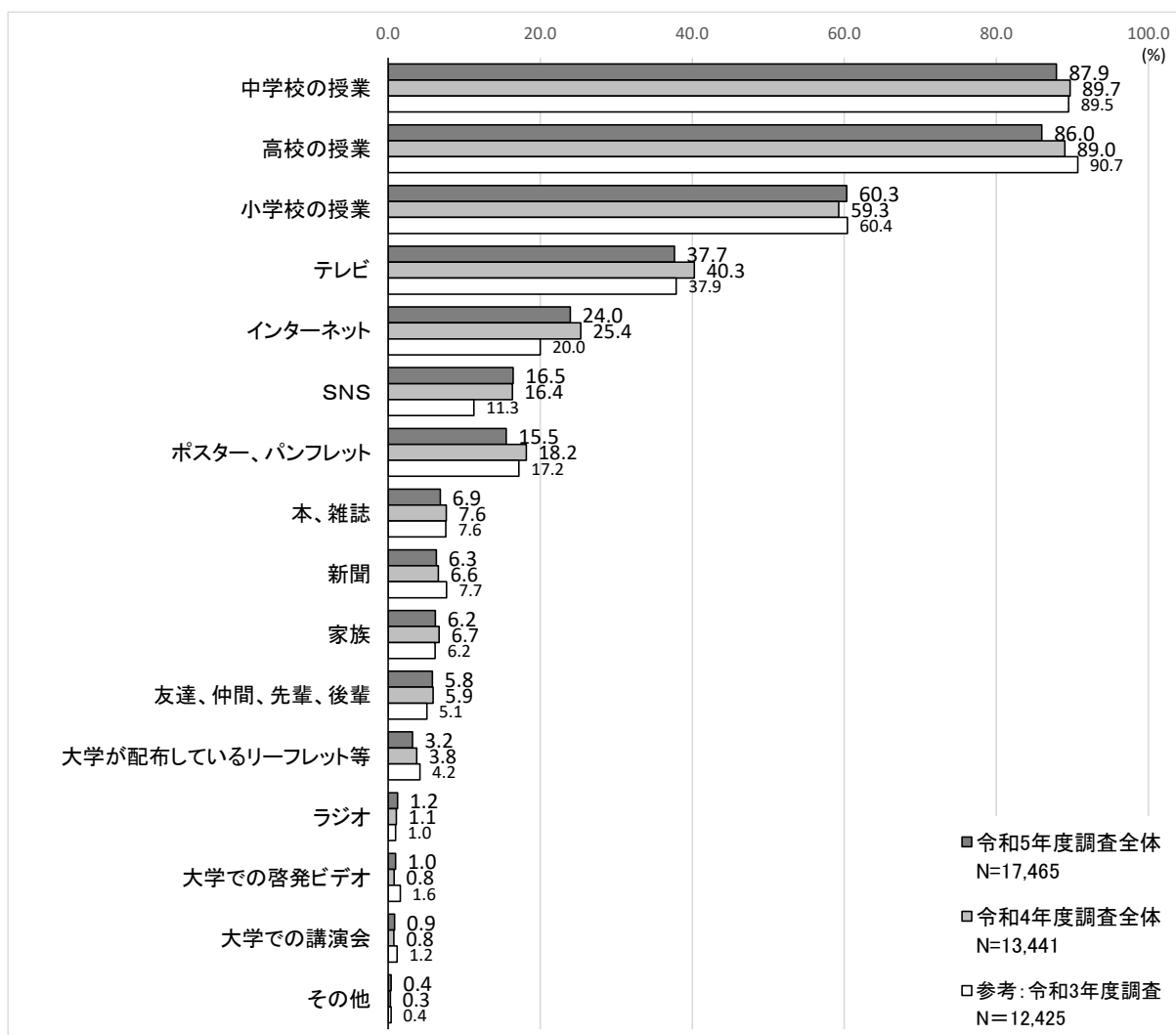
質問2で提示した薬物についての情報源は、令和4年度調査と同様に、「中学校の授業」(87.9%)と「高校の授業」(86.0%)が9割近くとなっている。「小学校の授業」も60.3%となっており、大学に進学する前に学校の授業で薬物についての何らかの情報を入手していることがうかがえる。

「テレビ」(37.7%)、「インターネット」(24.0%)、「SNS」(16.5%)も令和4年度調査と同様の割合となっている。

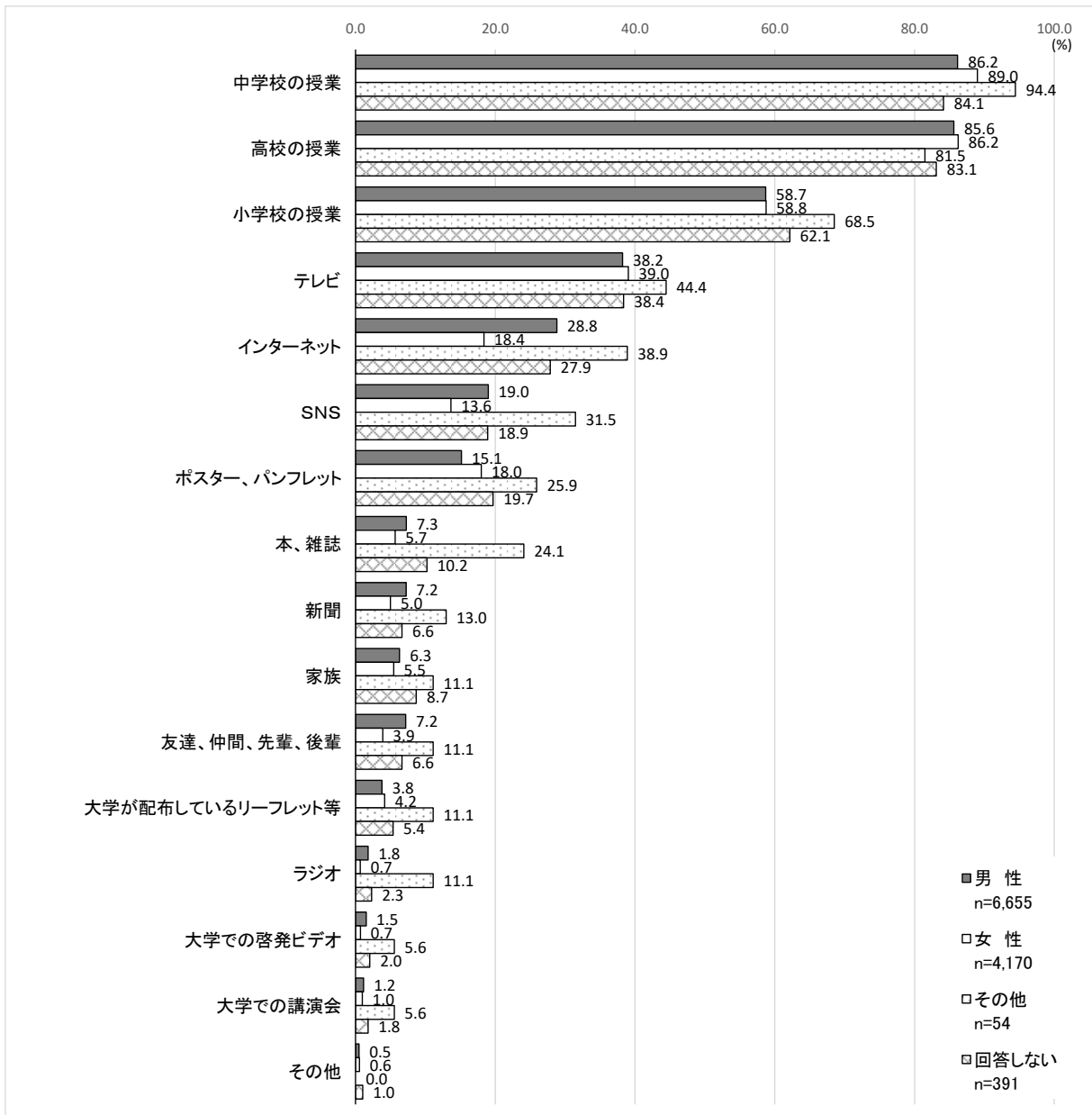
性別にみると、「女性」は他に比べて、「インターネット」、「SNS」を情報源としている割合がやや少ない。

「その他」として記載されている内容では、「音楽」や「映画・漫画・テレビ」、「ゲーム」などを通じて情報を得たとしている。

図表8 薬物の情報源  
 <<令和4年度調査との比較>>



### 《性別比較》



## (設問順)

	令和5年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	17,465		6,655		4,170		54		391		13,441	
小学校の授業	10,534	60.3	3,907	58.7	2,450	58.8	37	68.5	243	62.1	7,966	59.3
中学校の授業	15,352	87.9	5,734	86.2	3,711	89.0	51	94.4	329	84.1	12,056	89.7
高校の授業	15,014	86.0	5,699	85.6	3,596	86.2	44	81.5	325	83.1	11,962	89.0
大学が配布しているリーフレット等	561	3.2	252	3.8	174	4.2	6	11.1	21	5.4	506	3.8
大学での啓発ビデオ	171	1.0	101	1.5	29	0.7	3	5.6	8	2.0	106	0.8
大学での講演会	153	0.9	77	1.2	40	1.0	3	5.6	7	1.8	102	0.8
友達、仲間、先輩、後輩	1,020	5.8	478	7.2	162	3.9	6	11.1	26	6.6	797	5.9
家族	1,087	6.2	419	6.3	228	5.5	6	11.1	34	8.7	903	6.7
ポスター、パンフレット	2,715	15.5	1,008	15.1	750	18.0	14	25.9	77	19.7	2,446	18.2
本、雑誌	1,199	6.9	483	7.3	236	5.7	13	24.1	40	10.2	1,028	7.6
新聞	1,108	6.3	481	7.2	208	5.0	7	13.0	26	6.6	887	6.6
テレビ	6,580	37.7	2,544	38.2	1,628	39.0	24	44.4	150	38.4	5,415	40.3
ラジオ	216	1.2	120	1.8	28	0.7	6	11.1	9	2.3	146	1.1
インターネット	4,184	24.0	1,917	28.8	767	18.4	21	38.9	109	27.9	3,408	25.4
SNS	2,873	16.5	1,264	19.0	569	13.6	17	31.5	74	18.9	2,198	16.4
その他	69	0.4	33	0.5	23	0.6	0	0.0	4	1.0	40	0.3
累計	62,836		24,517		14,599		258		1,482		49,966	

図表9 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
音楽	6	辞書・本	2
映画・漫画・テレビ	4	YouTube	1
ゲーム	3	職場	1
大学の講義	3	中学校の生徒会活動	1
警察	2	ポスター・コンクール	1
知人・個人	2	覚えていない	2
記載なし	32		

(9) 薬物の怖さについての更なる学習について

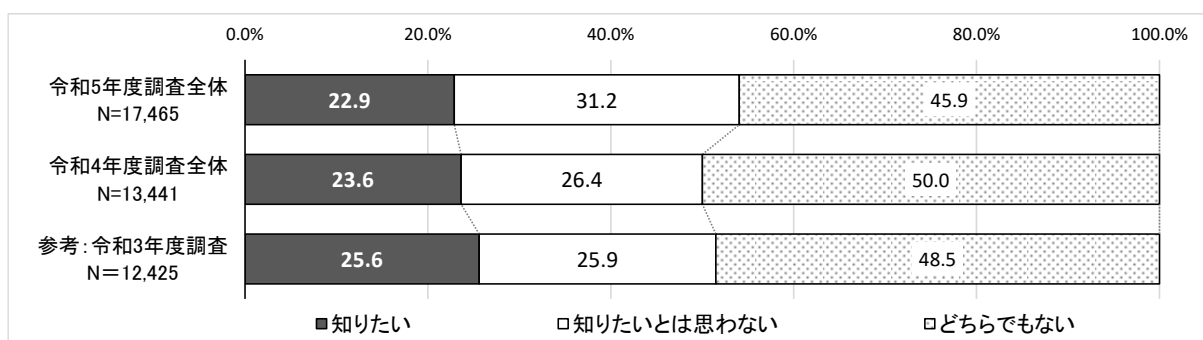
問8 あなたは、これらの薬物を使うことの怖さ（有害性、危険性）をもっと知りたいですか。（1つ選択）

質問2で提示した薬物を使うことの怖さ（有害性、危険性）についてもっと知りたいかについては、「どちらでもない」が45.9%と最も多く、「知りたいとは思わない」が31.2%、「知りたい」が22.9%となっている。

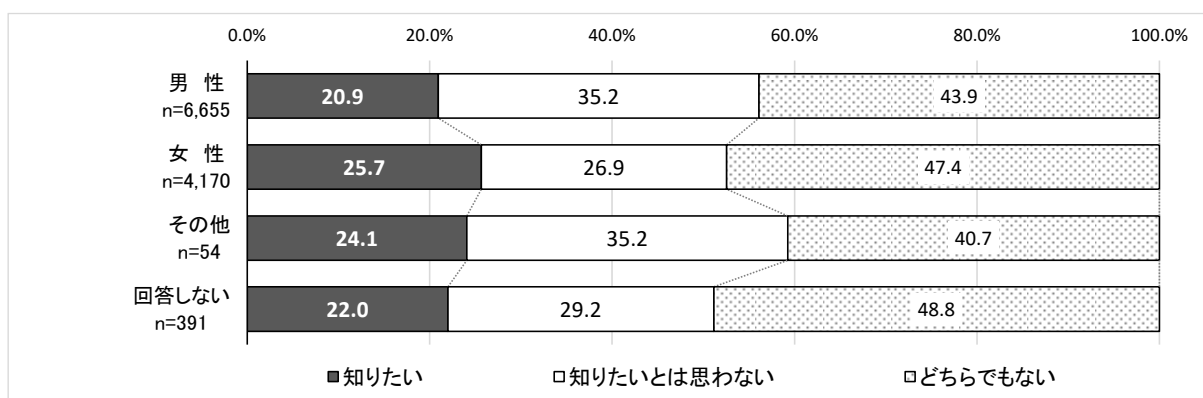
令和4年度調査と比較して、「知りたいとは思わない」の割合がやや増え、「どちらでもない」がやや減っている。

性別にみると、「女性」は「知りたい」の割合が他に比べてやや多い。

図表10 薬物の怖さについての更なる学習の必要性  
 ≪令和4年度調査との比較≫



≪性別比較≫



	令和5年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
回答者数	17,465	100.0	6,655	100.0	4,170	100.0	54	100.0	391	100.0	13,441	100.0
知りたい	3,998	22.9	1,394	20.9	1,070	25.7	13	24.1	86	22.0	3,176	23.6
知りたいとは思わない	5,443	31.2	2,340	35.2	1,122	26.9	19	35.2	114	29.2	3,548	26.4
どちらでもない	8,024	45.9	2,921	43.9	1,978	47.4	22	40.7	191	48.8	6,717	50.0

## (10) 薬物の害を学ぶ場

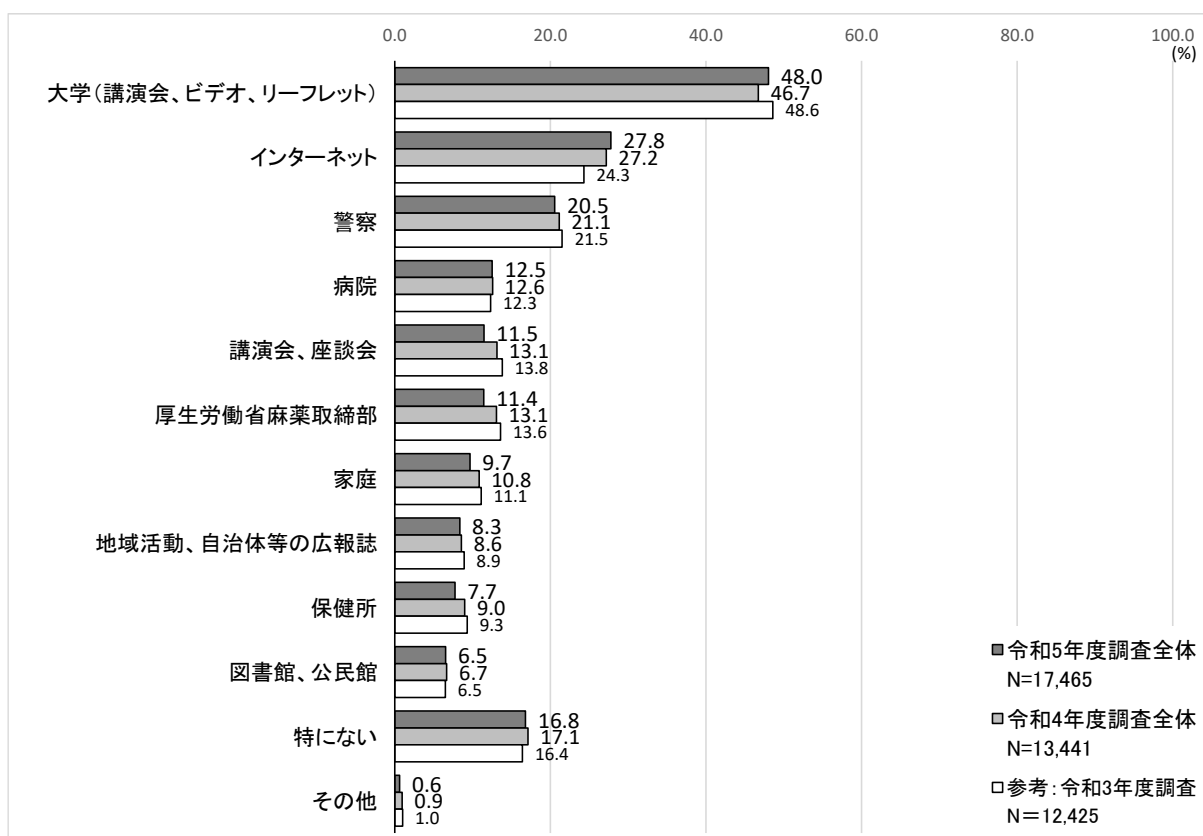
問9 あなたは、これらの薬物を使った場合の害について学ぶとしたらどこがよいと思いますか。(複数選択可)

質問2で提示した薬物を使った場合の害について学ぶ場としては、「大学(講演会、ビデオ、リーフレット)」が48.0%と最も多く、「インターネット」が27.8%、「警察」が20.5%となっている。令和4年度調査と同様の結果となっている。

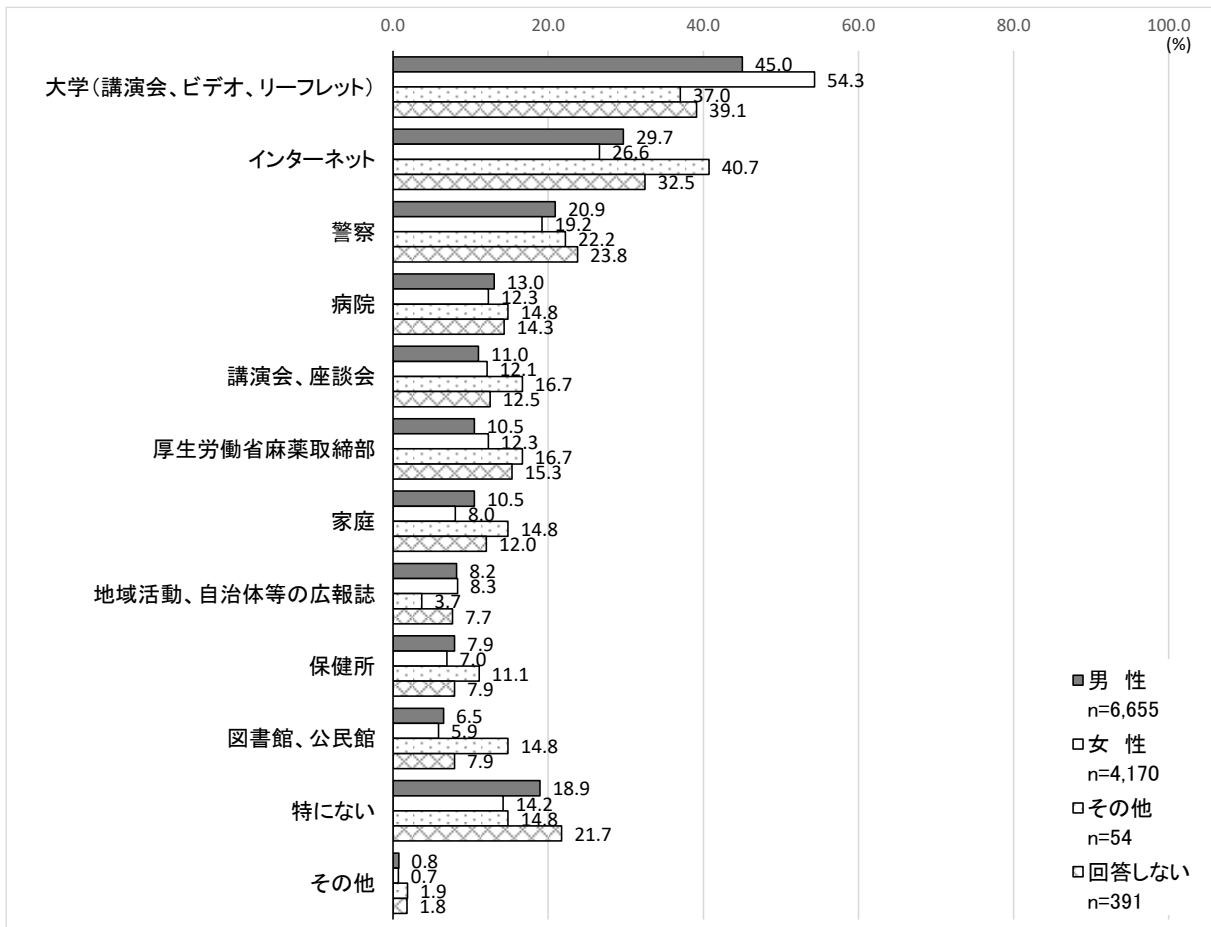
性別にみると、「女性」は「大学(講演会、ビデオ、リーフレット)」の割合が、他に比べて多い。

「その他」に記載されている内容では、大学入学までの小・中・高校などで学ぶのがよいとする記載が多い。「テレビ」との記載もある。「薬物使用経験者等の講演」と具体的な事例や実体験を知ることの意味があるとする記載もある。

図表11 薬物の害を学ぶ場  
 <<令和4年度調査との比較>>



《性別比較》



(設問順)

	令和5年度調査		大学コンソーシアム大阪調査 (N=11,270)								令和4年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	17,465		6,655		4,170		54		391		13,441	
大学(講演会、ビデオ、リーフレット)	8,391	48.0	2,997	45.0	2,266	54.3	20	37.0	153	39.1	6,282	46.7
家庭	1,688	9.7	698	10.5	335	8.0	8	14.8	47	12.0	1,457	10.8
地域活動、自治体等の広報誌	1,457	8.3	546	8.2	347	8.3	2	3.7	30	7.7	1,150	8.6
図書館、公民館	1,140	6.5	434	6.5	244	5.9	8	14.8	31	7.9	897	6.7
保健所	1,351	7.7	527	7.9	290	7.0	6	11.1	31	7.9	1,207	9.0
警察	3,589	20.5	1,392	20.9	801	19.2	12	22.2	93	23.8	2,839	21.1
厚生労働省麻薬取締部	1,998	11.4	697	10.5	512	12.3	9	16.7	60	15.3	1,756	13.1
病院	2,184	12.5	867	13.0	513	12.3	8	14.8	56	14.3	1,688	12.6
インターネット	4,853	27.8	1,976	29.7	1,110	26.6	22	40.7	127	32.5	3,653	27.2
講演会、座談会	2,004	11.5	732	11.0	506	12.1	9	16.7	49	12.5	1,764	13.1
特にない	2,934	16.8	1,261	18.9	591	14.2	8	14.8	85	21.7	2,301	17.1
その他	109	0.6	51	0.8	28	0.7	1	1.9	7	1.8	125	0.9
累計	31,698		12,178		7,543		113		769		25,119	



図表 12 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
小・中・高校（いずれかを含む）	27	薬物依存者の更生施設	1
テレビ	12	わかりやすいパンフレット	1
薬物使用経験者等の講演	6	高校・少年院	1
ネット（SNS、YouTube、広告動画）	6	その他	2
漫画・書籍	2	記載なし	29

(11) 薬物使用者が増加している理由

問 10 あなたは、これらの薬物を使う人が増えているのはどのような理由からだと思  
いますか。（複数選択可）

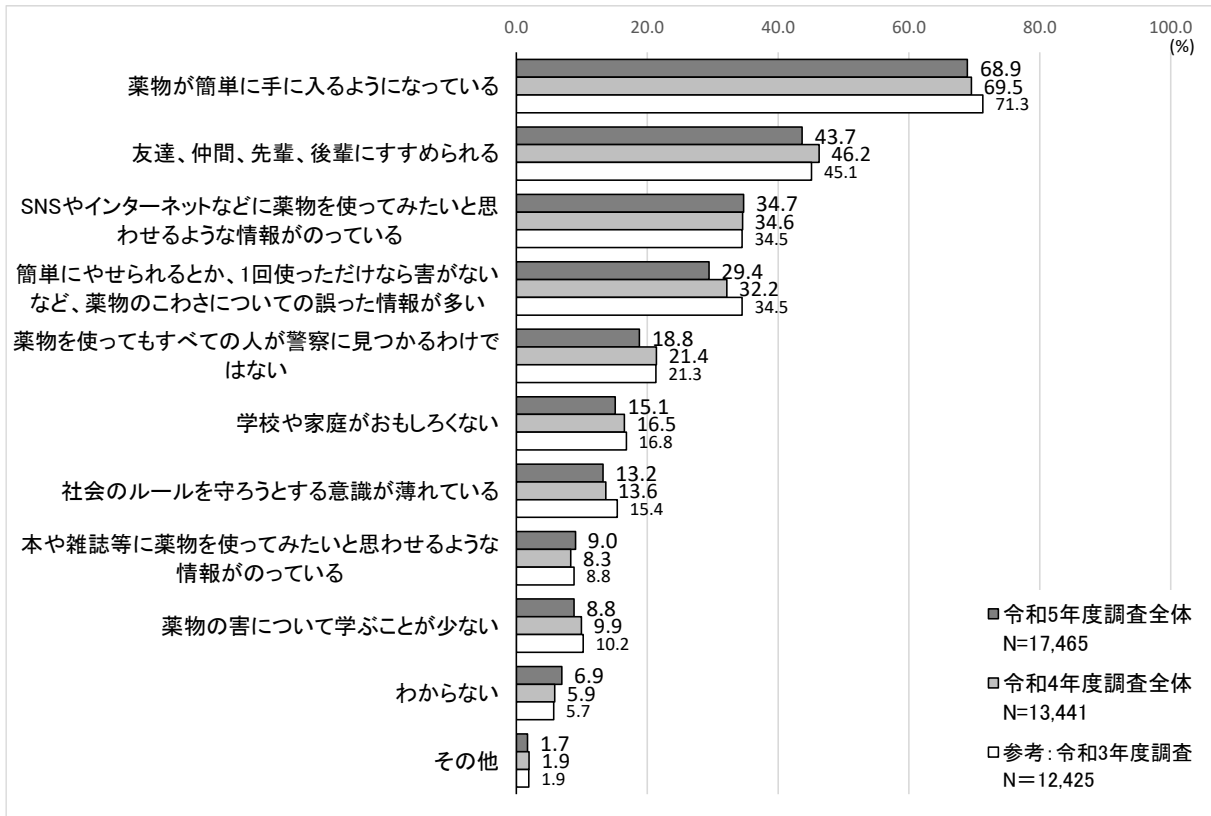
質問2で提示した薬物を使う人が増えている理由として、「薬物が簡単に手に入るようになっている」が68.9%と最も多く、「友達、仲間、先輩、後輩にすすめられる」が43.7%、「SNSやインターネットなどに薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている」が34.7%、「簡単にやせられるとか、1回使っただけなら害がないなど、薬物のこわさについての誤った情報が多い」が29.4%となっており、令和4年度調査と同様の結果となっている。

「薬物を使ってもすべての人が警察に見つかるわけではない」（18.8%）、「社会のルールを守ろうとする意識が薄れている」（13.2%）と、規範意識の低下を挙げている人もいる。

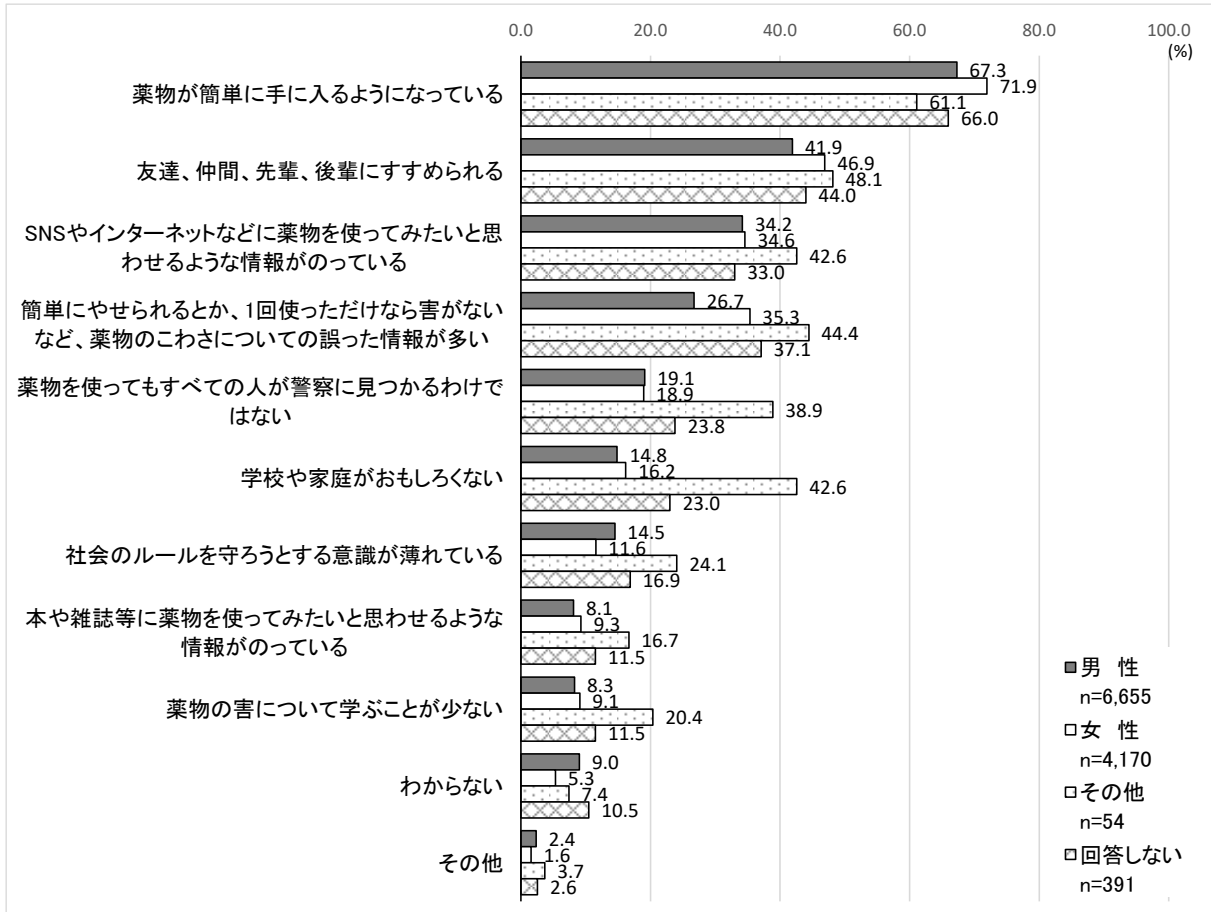
「学校や家庭がおもしろくない」も15.1%となっており、「その他」の記載でも「ストレス」、「現実逃避」、「生きづらさ」、「心身の疲れ」、「自暴自棄」や「ストレス社会」、「社会の問題」、「社会的不安」など、社会の中で生きていく上での問題に着目している回答が多い。

性別にみると、「薬物が簡単に手に入るようになっている」、「友達、仲間、先輩、後輩にすすめられる」については、「女性」の割合が他に比べてやや多い。

図表 13 薬物使用者が増加している理由  
 ≪令和4年度調査との比較≫



≪性別比較≫



## (設問順)

	令和5年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査 全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
			n	%	n	%	n	%	n	%		
回答者数	17,465		6,655		4,170		54		391		13,441	
薬物が簡単に手に入るようになっている	12,039	68.9	4,478	67.3	3,000	71.9	33	61.1	258	66.0	9,346	69.5
本や雑誌等に薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている	1,577	9.0	541	8.1	387	9.3	9	16.7	45	11.5	1,116	8.3
SNSやインターネットなどに薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている	6,065	34.7	2,275	34.2	1,442	34.6	23	42.6	129	33.0	4,644	34.6
社会のルールを守ろうとする意識が薄れている	2,314	13.2	966	14.5	483	11.6	13	24.1	66	16.9	1,834	13.6
薬物を使ってもすべての人が警察に見つかるわけではない	3,285	18.8	1,272	19.1	790	18.9	21	38.9	93	23.8	2,878	21.4
簡単にやせられるとか、1回使っただけなら害がないなど、薬物のこわさについての誤った情報が多い	5,142	29.4	1,779	26.7	1,474	35.3	24	44.4	145	37.1	4,324	32.2
薬物の害について学ぶことが少ない	1,536	8.8	551	8.3	379	9.1	11	20.4	45	11.5	1,335	9.9
友達、仲間、先輩、後輩にすすめられる	7,627	43.7	2,790	41.9	1,956	46.9	26	48.1	172	44.0	6,216	46.2
学校や家庭がおもしろくない	2,638	15.1	987	14.8	675	16.2	23	42.6	90	23.0	2,219	16.5
わからない	1,210	6.9	602	9.0	223	5.3	4	7.4	41	10.5	787	5.9
その他	299	1.7	158	2.4	66	1.6	2	3.7	10	2.6	261	1.9
累計	43,732		16,399		10,875		189		1,094		34,960	

図表 14 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
ストレス(解消)のため	23	寂しさ・孤独	3
現実逃避	20	安易な解決策として使用	3
ストレス社会	15	話にのせられて・軽はずみ	3
かっこいいと勘違い	13	反社会勢力の存在	2
生きづらさ	11	絶望感	2
社会の問題	10	生活環境の問題	2
心身の疲れ	8	環境	2
社会的不安	8	お金のある人の暇つぶし	2
自暴自棄	7	取り締まりの緩さ・刑の軽さ	2
知らずに使用	7	ダークウェブ	1
情報の流布	7	専門知識が逆効果	1
追い詰められている・救済	7	自由を尊重した結果	1
思考力の低下	6	依存社会	1
合法的な国もある	6	意識の変化	1
好奇心・快楽・刺激	6	強要されて	1
経済困窮	5	簡単に入手できる	1
興味本位	5	やめられなくなる	1
不安	5	大学デビュー	1
カリギュラ効果	4	その他	5
拒否できない弱さ	4	無記入	23

## (12) 薬物使用についての考え

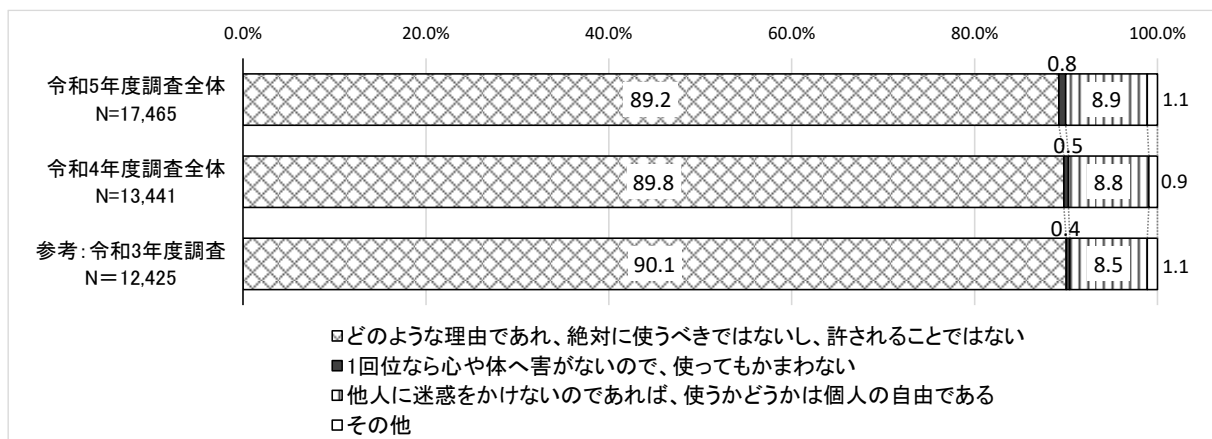
問 11 あなたは、これらの薬物を使うことについてどのように考えていますか。  
(1つ選択)

質問2で提示した薬物を使うことについての回答者の考えについては、89.2%が「どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない」としている。なお、「他人に迷惑をかけないのであれば、使うかどうかは個人の自由である」が8.9%である。令和4年度調査と同様の結果となっている。

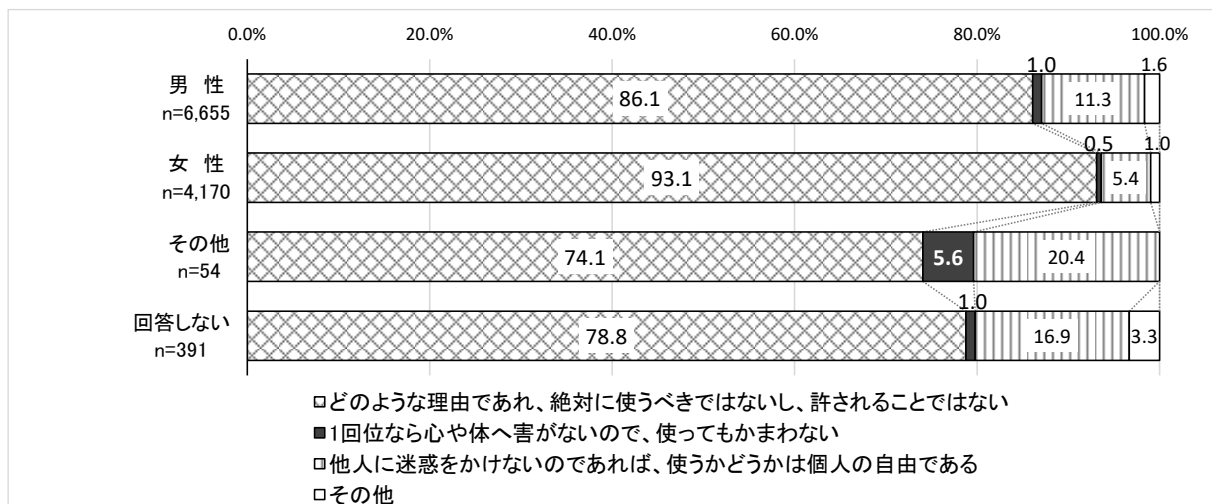
性別にみると、「どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない」の割合は、「女性」が最も多く、「他人に迷惑をかけないのであれば、使うかどうかは個人の自由である」の割合は、「男性」、「性別無回答」で1割を超えている。

「その他」に記載されている内容では、使用に否定的な記載も多いが、「医療的使用は容認される」や「使うなら合法的な国で」との記載もある。また、「使用者・追い込まれた人への支援が必要」との指摘もある。

図表 15 薬物使用についての考え  
《令和4年度調査との比較》



### 《性別比較》



	令和5年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	17,465	100.0	6,655	100.0	4,170	100.0	54	100.0	391	100.0	13,441	100.0
どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない	15,582	89.2	5,730	86.1	3,883	93.1	40	74.1	308	78.8	12,067	89.8
1回位なら心や体へ害がないので、使ってもかまわない	131	0.8	65	1.0	21	0.5	3	5.6	4	1.0	67	0.5
他人に迷惑をかけないのであれば、使うかどうかは個人の自由である	1,560	8.9	751	11.3	225	5.4	11	20.4	66	16.9	1,181	8.8
その他	192	1.1	109	1.6	41	1.0	0	0.0	13	3.3	126	0.9

図表 16 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
医療的使用は容認される	21	場合によっては使用可・見逃す	3
使用者・追い込まれた人への支援が必要	10	薬物による	3
自己責任・個人の自由	9	よくない・使わない方がよい	2
使うべきではない	9	基本的には禁止	2
興味がない	7	根絶は難しい	2
自分はやらない・身内にも使わせない	7	植物を絶滅化すべき	1
国の法律に従うべき	7	親が可哀想	1
犯罪・処罰されるべき	7	合法にしてもよい	1
他人に迷惑をかける恐れがある	6	わからない	1
使うなら合法的な国で	5	その他	1
他人に迷惑をかけないならよい	5	記入なし	53

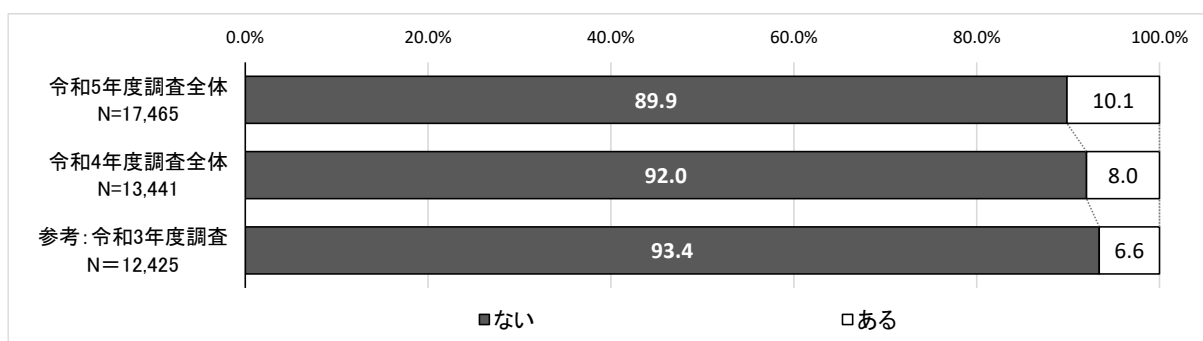
(13) 薬物使用の現場に居合わせたことの有無

問 12 あなたは、これらの薬物が使用されているところを直接見たことがありますか。  
 〈テレビ、映画、報道等で観たものは除きます〉(どちらかを選択)

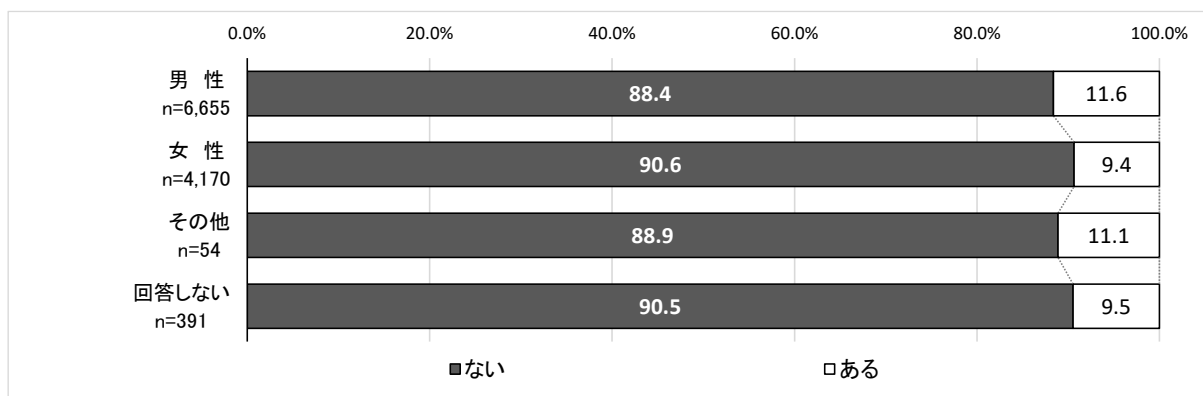
質問2で提示した薬物が使用されているところを直接見たことがあるかについては、89.9%が「ない」としているが、10.1%が「ある」としており、10人に1人は薬物使用の現場を目撃している。令和4年度調査と同様の結果となっている。

性別にみても顕著な差はない。

図表 17 薬物使用の現場に居合わせたことの有無  
 ≪令和4年度調査との比較≫



≪性別比較≫



	令和5年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
回答者数	17,465	100.0	6,655	100.0	4,170	100.0	54	100.0	391	100.0	13,441	100.0
ない	15,696	89.9	5,881	88.4	3,780	90.6	48	88.9	354	90.5	12,368	92.0
ある	1,769	10.1	774	11.6	390	9.4	6	11.1	37	9.5	1,073	8.0

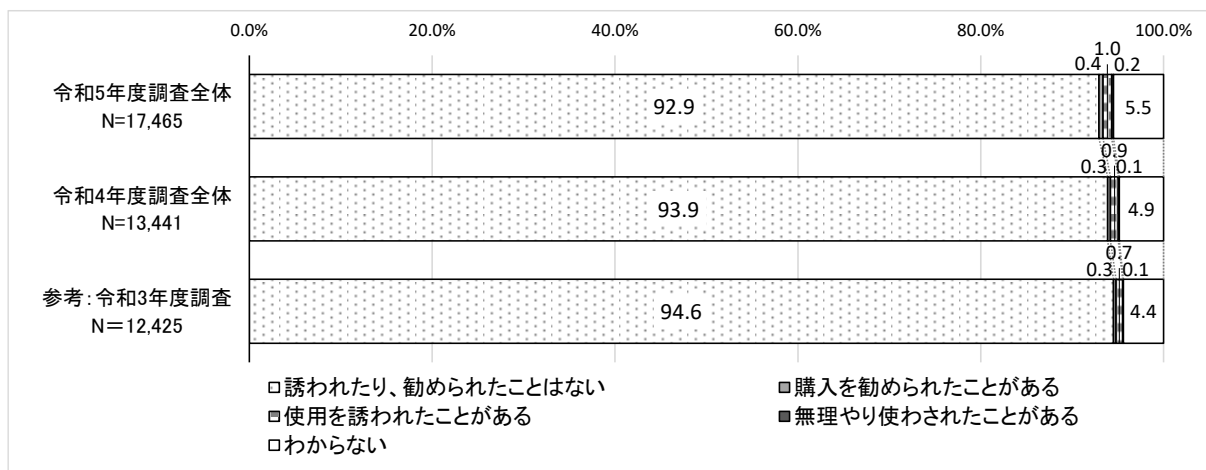
(14) 薬物使用等の勧誘経験の有無

問 13 あなたは、これらの薬物を使用することや購入することを誘われたり、勧められたりすることが、これまでにありましたか。(1つ選択)

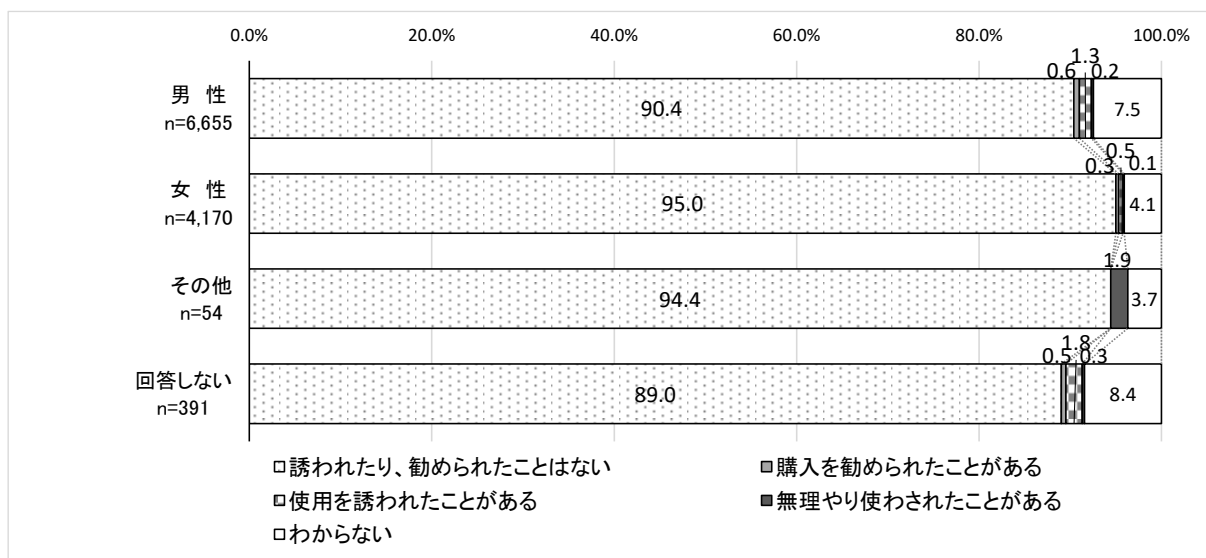
質問2で提示した薬物の使用や購入を誘われたり、勧められたことの経験については、92.9%が「誘われたり、勧められたことはない」としているが、「ある」(「購入を勧められたことがある」、「使用を誘われたことがある」、「無理やり使わされたことがある」の合計)が1.6%となっており、100人に1人は薬物購入や使用の現場にいたことがある。

性別にみると、「誘われたり、勧められたことはない」の割合は、「女性」が他に比べてやや多く、「わからない」、「ある」(「購入を勧められたことがある」、「使用を誘われたことがある」、「無理やり使わされたことがある」の合計)が「男性」、「性別無回答」は「女性」よりやや多い。

図表 18 薬物使用等の勧誘経験の有無  
 <<令和4年度調査との比較>>



<<性別比較>>



	令和5年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査 全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
			n	%	n	%	n	%	n	%		
回答者数	17,465	100.0	6,655	100.0	4,170	100.0	54	100.0	391	100.0	13,441	100.0
誘われたり、勧められたことはない	16,231	92.9	6,015	90.4	3,961	95.0	51	94.4	348	89.0	12,618	93.9
購入を勧められたことがある	75	0.4	41	0.6	13	0.3	0	0.0	2	0.5	41	0.3
使用を誘われたことがある	168	1.0	87	1.3	20	0.5	0	0.0	7	1.8	117	0.9
無理やり使わされたことがある	33	0.2	16	0.2	6	0.1	1	1.9	1	0.3	13	0.1
わからない	958	5.5	496	7.5	170	4.1	2	3.7	33	8.4	652	4.9

(15) 薬物使用を勧誘された時の行動

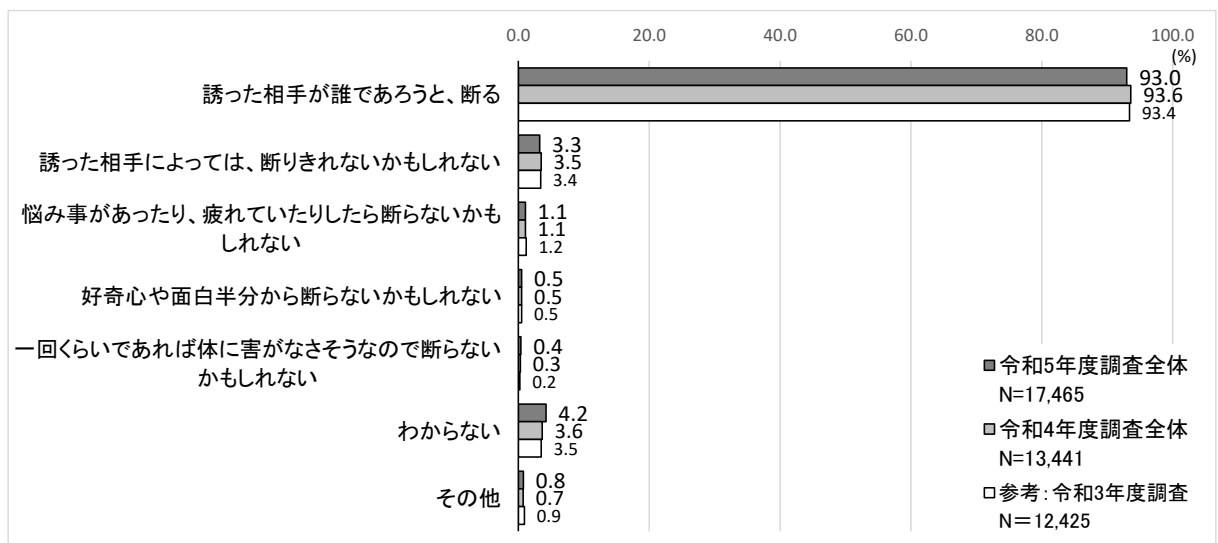
問 14 あなたは、これらの薬物を使用することを誰かに誘われたら、どのように行動しますか。(複数回答可)

質問2で提示した薬物を使用することを誰かに誘われた場合、93.0%が「誘った相手が誰であろうと、断る」としている。「その他」に記載されている内容も、「警察に通報する」、「絶縁する」、「逃げる」などの記載が多い。

一方、「わからない」が4.2%、「誘った相手によっては、断りきれないかもしれない」が3.3%、「悩み事があったり、疲れていたりしたら断らないかもしれない」が1.1%となっており、令和4年度調査と同様に状況によっては使用する可能性を示している回答がある。

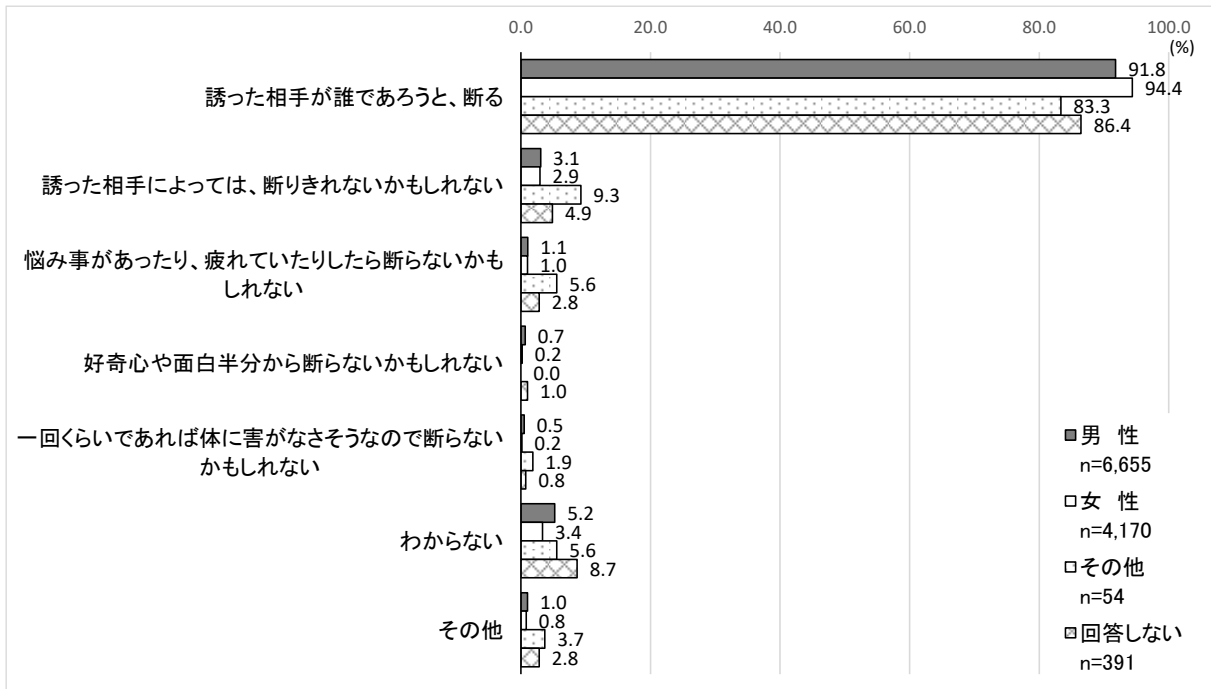
性別にみると、「誘った相手が誰であろうと、断る」の割合は、「女性」が他に比べてやや多く、「わからない」は「性別無回答」でやや多い。

図表 19 薬物使用を勧誘された時の行動  
 <<令和4年度調査との比較>>





《性別比較》



(設問順)

	令和5年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
			n	%	n	%	n	%	n	%		
回答者数	17,465		6,655		4,170		54		391		13,441	
誘った相手が誰であろうと、断る	16,236	93.0	6,108	91.8	3,936	94.4	45	83.3	338	86.4	12,582	93.6
誘った相手によっては、断りきれないかもしれない	568	3.3	203	3.1	123	2.9	5	9.3	19	4.9	466	3.5
一回くらいであれば体に害がなさそうなので断らないかもしれない	67	0.4	33	0.5	7	0.2	1	1.9	3	0.8	39	0.3
好奇心や面白半分から断らないかもしれない	84	0.5	44	0.7	9	0.2	0	0.0	4	1.0	67	0.5
悩み事があつたり、疲れていたりしたら断らないかもしれない	186	1.1	72	1.1	43	1.0	3	5.6	11	2.8	142	1.1
わからない	739	4.2	348	5.2	140	3.4	3	5.6	34	8.7	490	3.6
その他	133	0.8	69	1.0	35	0.8	2	3.7	11	2.8	98	0.7
累計	18,013		6,877		4,293		59		420		13,884	

図表 20 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
警察に通報する	36	無視する	2
絶縁する	13	戦う	2
逃げる	10	断らない	1
断る・泣く・演じる	6	分からない	1
警察に連行する	5	騙されたら分からない	1
断り切れるか分からない	5	穏便な断り方が分からない	1
捨てる	4	学ぶ	1
家族等に相談する	4	経験がない	2
説得する	3	記入なし	20

(16) 周囲での薬物所持・使用者の有無

問 15(ア) あなたの周囲に、これらの薬物を所持したり、使用している（いた）人がいますか。（1つ選択）

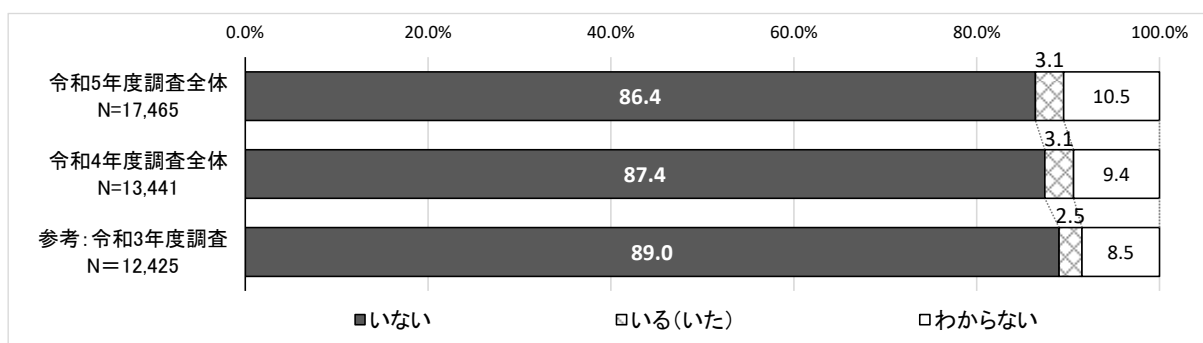
質問 15(ア)で「いる（いた）」を選択した人だけお答えください。

（イ） どの薬物でしたか。（複数回答可）

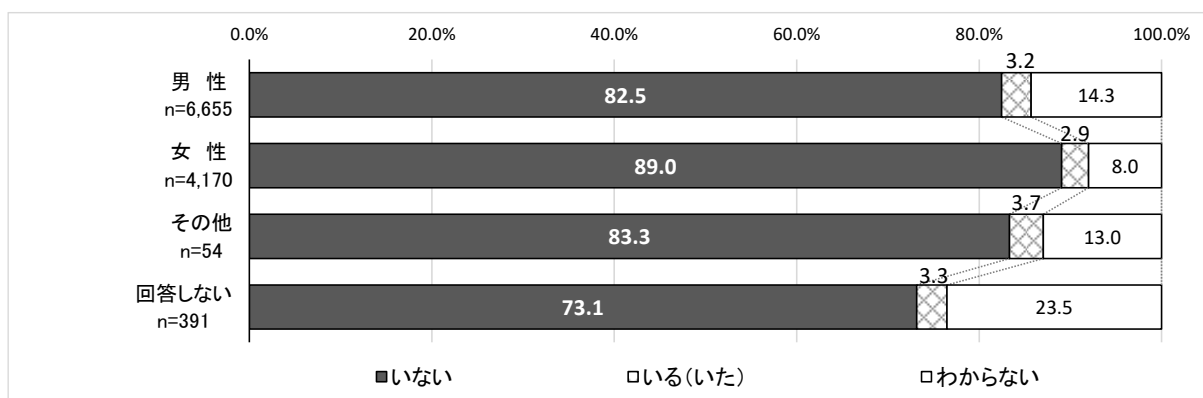
周囲に質問 2 で提示した薬物を所持したり、使用している（いた）人がいるかについては、86.4%が「いない」としているが、3.1%が「いる（いた）」としており、100 人に 3 人は所持・使用者を知っている状況にある。令和 4 年度調査と同様の結果となっている。

性別にみると、「いない」の割合は「女性」が他に比べてやや多く、「わからない」の割合は「性別無回答」が多い。

図表 21 周囲での薬物所持・使用者の有無  
 <<令和 4 年度調査との比較>>



<<性別比較>>



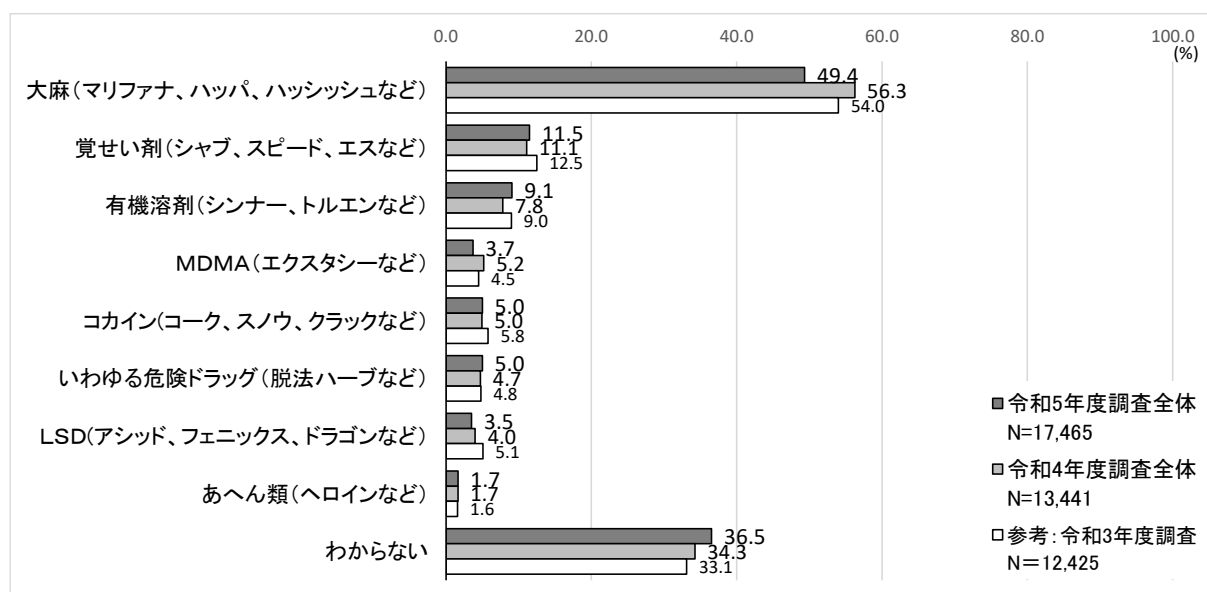
	令和5年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
回答者数	17,465	100.0	6,655	100.0	4,170	100.0	54	100.0	391	100.0	13,441	100.0
いない	15,096	86.4	5,488	82.5	3,713	89.0	45	83.3	286	73.1	11,753	87.4
いる(いた)	539	3.1	215	3.2	123	2.9	2	3.7	13	3.3	423	3.1
わからない	1,830	10.5	952	14.3	334	8.0	7	13.0	92	23.5	1,265	9.4

周囲に所持・使用している人が「いる(いた)」とした人に所持・使用されていた薬物をたずねたところ、「大麻(マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど)」が49.4%と最も多い。2番目に多い所持・使用薬物は「覚醒剤(シャブ、スピード、エスなど)」(11.5%)、3番目が「有機溶剤(シンナー、トルエンなど)」(9.1%)である。なお、「わからない」が36.5%である。

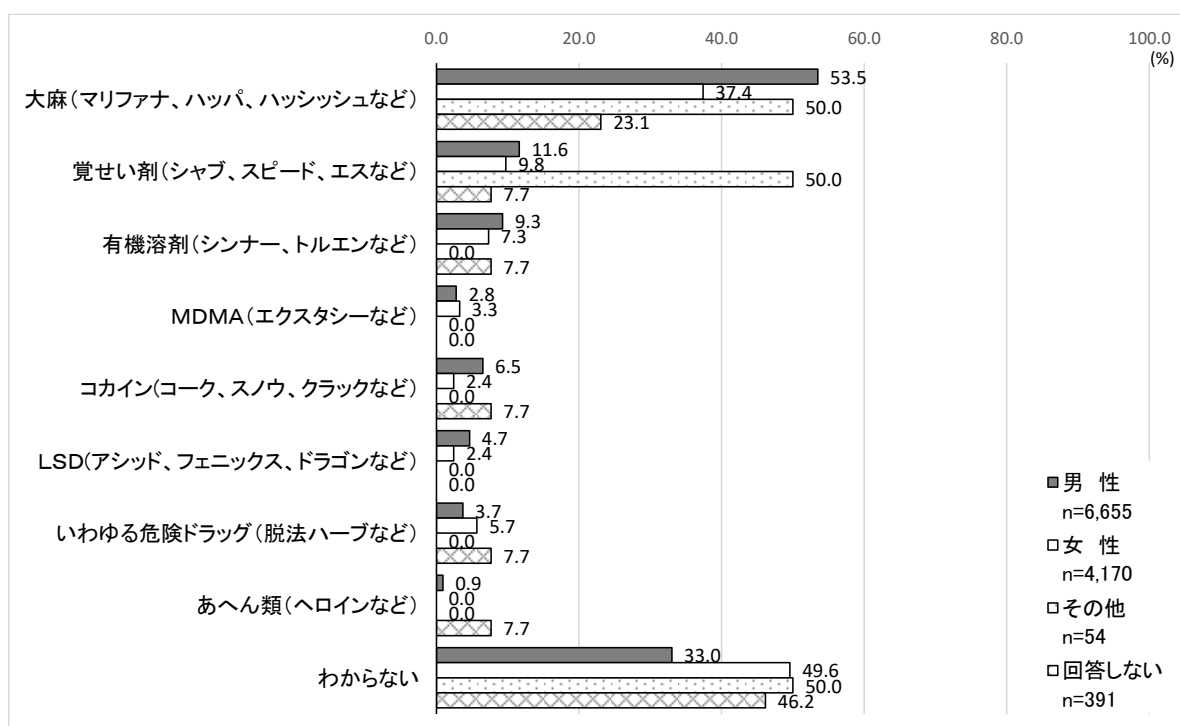
令和4年度調査と比較すると、「大麻(マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど)」の割合がやや減っている。

性別にみると、「女性」と「性別無回答」は「わからない」の割合が選択肢の中で最も多い。「男性」は他に比べて「わからない」の割合が少ない。

図表 22 使用していた薬物  
 <<令和4年度調査との比較>>



<<性別比較>>



## (設問順)

	令和5年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	539		215		123		2		13		423	
有機溶剤（シンナー、トルエンなど）	49	9.1	20	9.3	9	7.3	0	0.0	1	7.7	33	7.8
覚せい剤（シャブ、スピード、エスなど）	62	11.5	25	11.6	12	9.8	1	50.0	1	7.7	47	11.1
大麻（マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど）	266	49.4	115	53.5	46	37.4	1	50.0	3	23.1	238	56.3
コカイン（コーク、スノウ、クラックなど）	27	5.0	14	6.5	3	2.4	0	0.0	1	7.7	21	5.0
あへん類（ヘロインなど）	9	1.7	2	0.9	0	0.0	0	0.0	1	7.7	7	1.7
LSD（アシッド、フェニックス、ドラゴンなど）	19	3.5	10	4.7	3	2.4	0	0.0	0	0.0	17	4.0
MDMA（エクスタシーなど）	20	3.7	6	2.8	4	3.3	0	0.0	0	0.0	22	5.2
いわゆる危険ドラッグ（脱法ハーブなど）	27	5.0	8	3.7	7	5.7	0	0.0	1	7.7	20	4.7
わからない	197	36.5	71	33.0	61	49.6	1	50.0	6	46.2	145	34.3
累計	676		271		145		3		14		550	

## (17) 友人の薬物使用を知った場合の対応

問 16 あなたは、もし友人がこれらの薬物を使用していることを知った場合、どうしますか。（1つ選択）

友人が質問2で提示した薬物を使用していることを知った場合どうするかについては、58.3%が「使用をやめるよう説得する」としている。

「警察に通報する」が12.6%、「他の人（先生や友人など）に伝える」が9.8%、「医療機関や保健所等に連絡する」が2.6%と、どこかに相談・通報・連絡するとした割合が25.0%である。

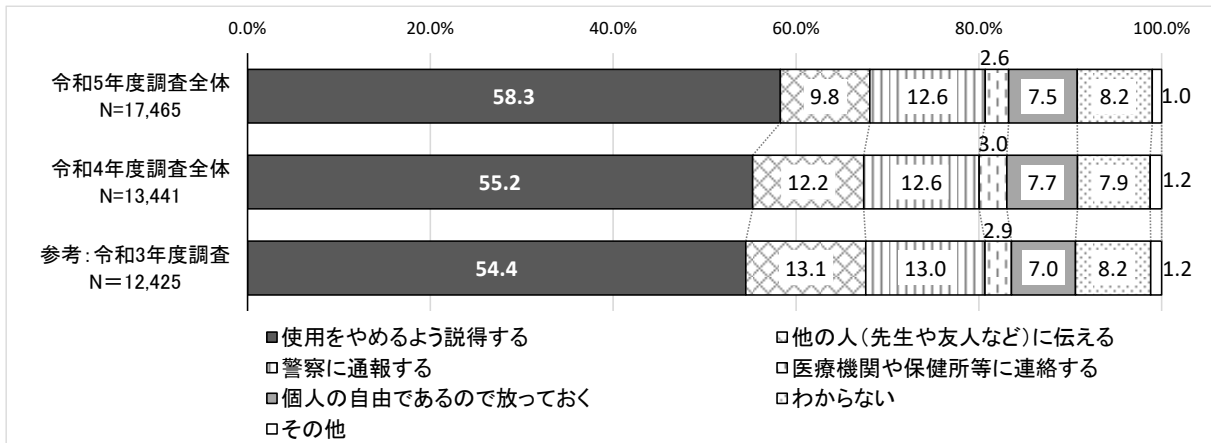
「わからない」が8.2%、「個人の自由であるので放っておく」が7.5%である。

令和4年度調査とほぼ同様の結果となっているが、「他の人（先生や友人など）に伝える」の割合がやや減り、「使用しないよう説得する」がやや増えている。

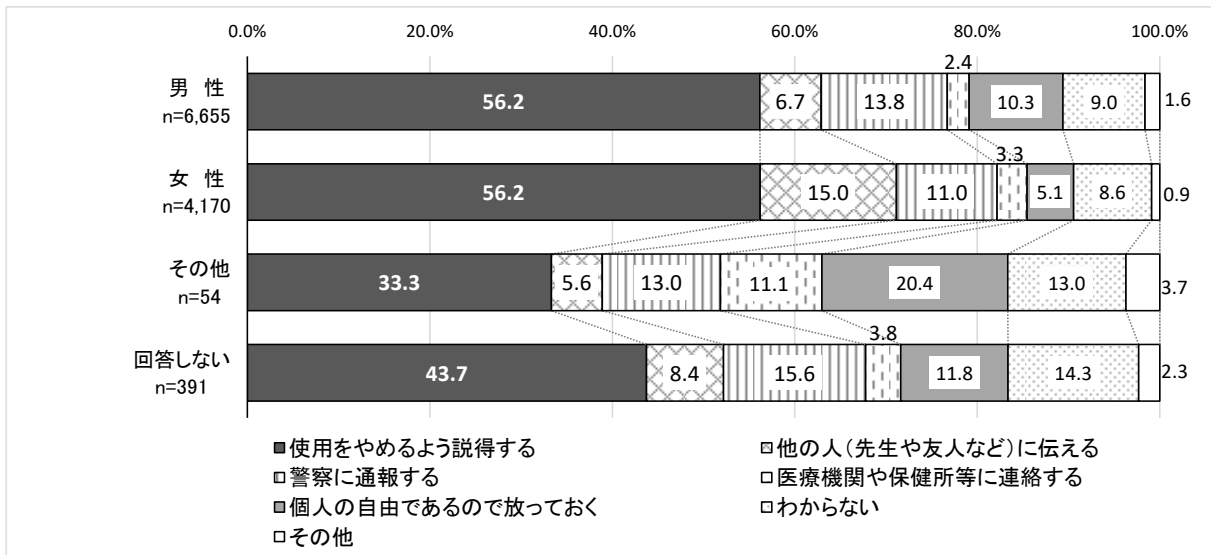
性別にみると、「女性」では「個人の自由であるので放っておく」の割合が他に比べて少なく、「他の人（先生や友人など）に伝える」が多い。「性別無回答」では、「使用をやめるよう説得する」が少なく、「警察に通報する」、「わからない」がやや多い。

「その他」として記載されている内容のうちの3割が「絶縁する」としている。「関わらない」、「放置する・見放す」も多い。一方で「説得する」、「相談する」、「話を聴く」という記載もある。

図表 23 友人が薬物使用を知った場合の対応  
 ≪令和4年度調査との比較≫



≪性別比較≫



	令和5年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
回答者数	17,465	100.0	6,655	100.0	4,170	100.0	54	100.0	391	100.0	13,441	100.0
使用をやめるよう説得する	10,179	58.3	3,739	56.2	2,343	56.2	18	33.3	171	43.7	7,426	55.2
他の人(先生や友人など)に伝える	1,709	9.8	446	6.7	624	15.0	3	5.6	33	8.4	1,636	12.2
警察に通報する	2,207	12.6	921	13.8	460	11.0	7	13.0	61	15.6	1,695	12.6
医療機関や保健所等に連絡する	447	2.6	159	2.4	137	3.3	6	11.1	15	3.8	409	3.0
個人の自由であるので放っておく	1,308	7.5	684	10.3	212	5.1	11	20.4	46	11.8	1,039	7.7
わからない	1,435	8.2	600	9.0	357	8.6	7	13.0	56	14.3	1,068	7.9
その他	180	1.0	106	1.6	37	0.9	2	3.7	9	2.3	168	1.2

図表 24 その他の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
絶縁する	50	説得する	9
関わらない	24	親や警察等に相談する	8
放置する・見放す	13	距離を置く	6
通報する	10	話を聴く	6
病院を勧める	4	どうにかする	1
殴る	2	バカにする	1
警察に同行する	2	人による	1
助言はする	2	その他	2
		記入なし	12

(18) 薬物に関する相談窓口の認知状況

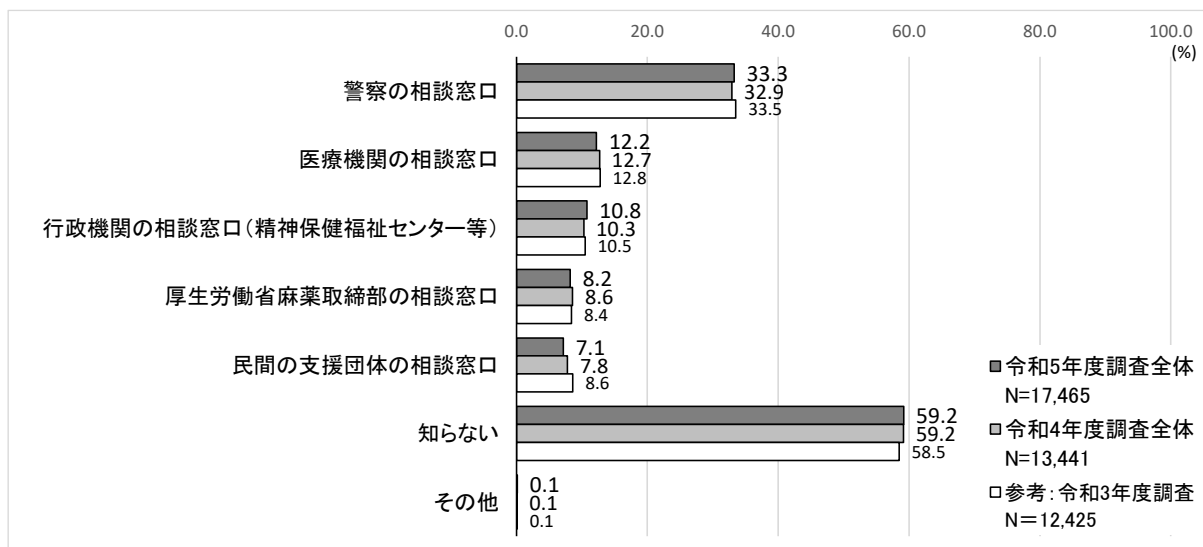
問 17 あなたは、これらの薬物に関する相談窓口があることを知っていますか。(複数選択可)

薬物に関する 5 つの相談窓口を提示してその認知状況をたずねたところ、59.2%が「知らない」としている。

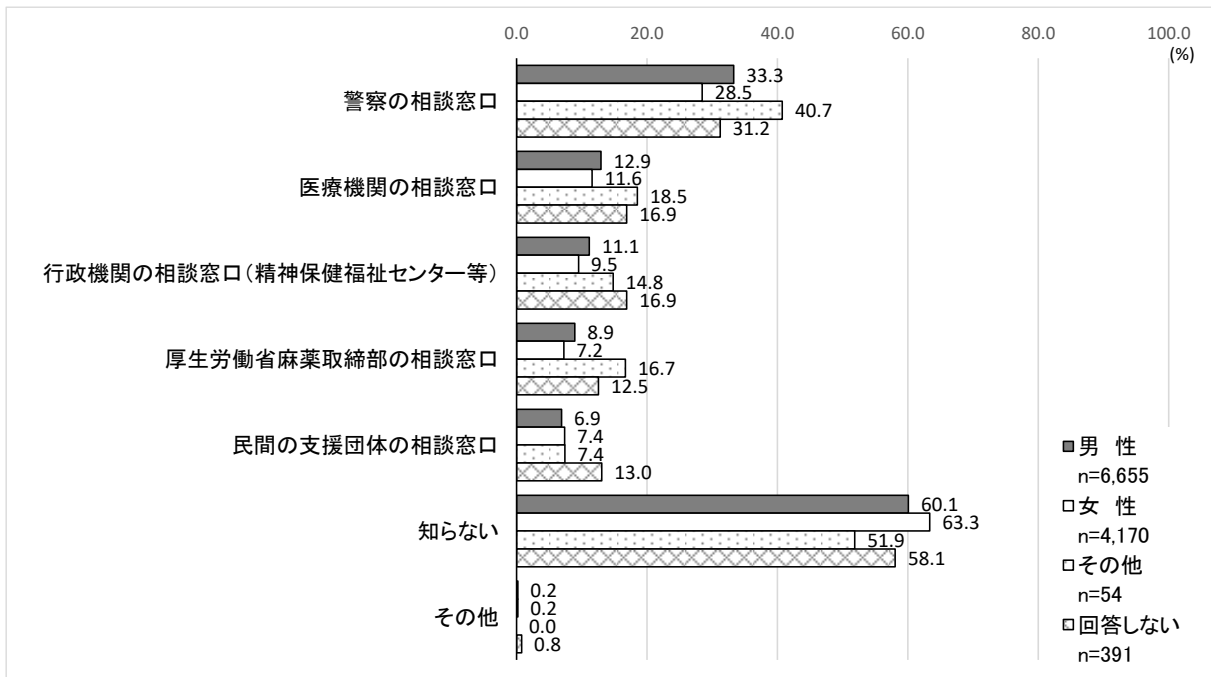
相談窓口の中では「警察の相談窓口」が 33.3%で最も認知されている。「医療機関」の認知度が 12.2%、「行政機関」が 10.8%、「厚生労働省麻薬取締部」が 8.2%、「民間の支援団体」が 7.1%である。令和 4 年度調査と同様の結果となっている。

性別にみると、「女性」は他に比べて「知らない」がやや多い。

図表 25 薬物に関する相談窓口の認知状況  
 <<令和 4 年度調査との比較>>



《性別比較》



(設問順)

	令和5年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)							令和4年度調査 全体		
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
			n	%	n	%	n	%	n	%		
回答者数	17,465		6,655		4,170		54		391		13,441	
警察の相談窓口	5,810	33.3	2,216	33.3	1,187	28.5	22	40.7	122	31.2	4,424	32.9
行政機関の相談窓口(精神保健福祉センター等)	1,883	10.8	742	11.1	396	9.5	8	14.8	66	16.9	1,383	10.3
厚生労働省麻薬取締部の相談窓口	1,434	8.2	595	8.9	302	7.2	9	16.7	49	12.5	1,150	8.6
医療機関の相談窓口	2,134	12.2	861	12.9	483	11.6	10	18.5	66	16.9	1,707	12.7
民間の支援団体の相談窓口	1,247	7.1	459	6.9	307	7.4	4	7.4	51	13.0	1,047	7.8
知らない	10,337	59.2	3,998	60.1	2,641	63.3	28	51.9	227	58.1	7,952	59.2
その他	25	0.1	13	0.2	8	0.2	0	0.0	3	0.8	10	0.1
累計	22,870		8,884		5,324		81		584		17,673	

図表 26 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数
詳細は不明	2
大学の相談窓口	1
知らなかった	1
記載なし	20

(19) 薬物に手を出さないように注意するために知りたい情報

問 18 あなたや、あなたのまわりの人がこれらの薬物に手を出さないように注意するために知りたいと思う情報は何か。(複数選択可)

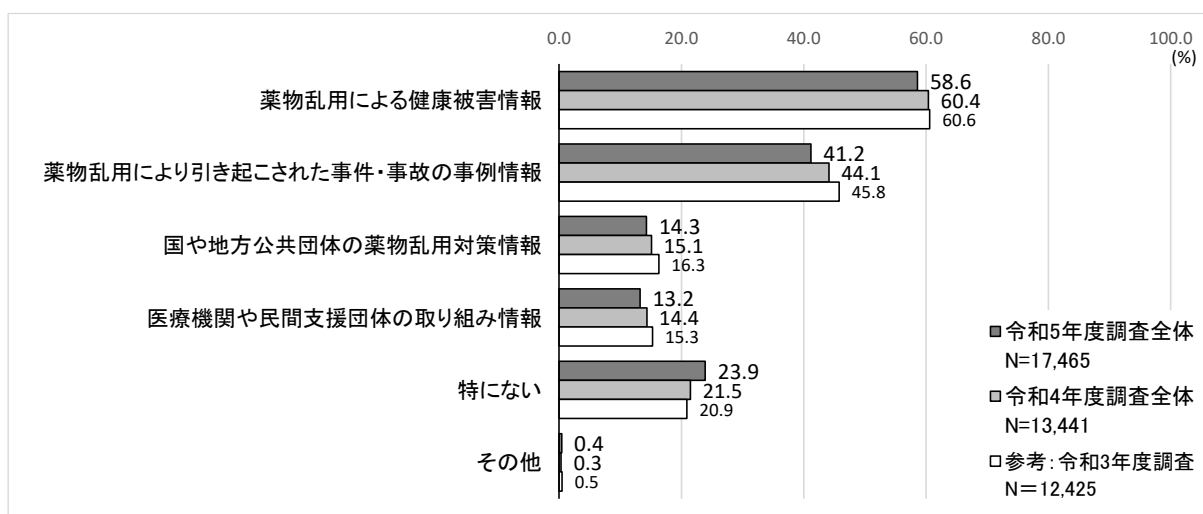
まわりの人が質問2で提示した薬物に手を出さないように注意するために知りたいと思う情報は、「薬物乱用による健康被害情報」が58.6%と最も多く、「薬物乱用により引き起こされた事件・事故の事例情報」が41.2%である。「国や地方公共団体の薬物乱用対策情報」は14.3%、「医療機関や民間支援団体の取り組み情報」は13.2%である。

令和4年度調査と同様の結果となっている。

性別にみると、「女性」は、「薬物乱用による健康被害情報」、「薬物乱用により引き起こされた事件・事故の事例情報」の割合が、他に比べてやや多い。

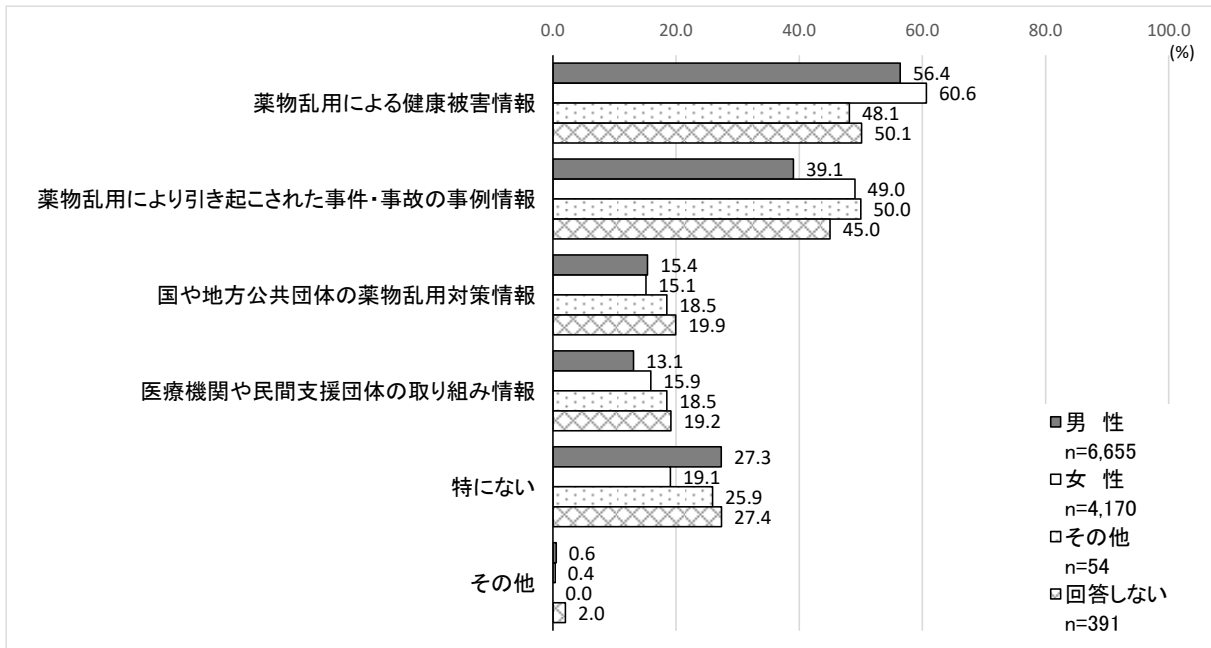
「その他」で記載された内容では、「体験談」、「薬物に関する情報」などが記載されている。「使用者の現状・影響」や「使用に至るまでの経緯・心理」など具体的な内容を知りたいとする記載もある。また、使用するという心理状態にならないよう、「心の健康保持のための取り組み」との記載もある。

図表 27 薬物に手を出さないよう注意するために知りたい情報  
 ≪令和4年度調査との比較≫





《性別比較》



	令和5年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査 全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
回答者数	17,465		6,655		4,170		54		391		13,441	
薬物乱用による健康被害情報	10,232	58.6	3,754	56.4	2,529	60.6	26	48.1	196	50.1	8,117	60.4
薬物乱用により引き起こされた事件・事故の事例情報	7,193	41.2	2,600	39.1	2,045	49.0	27	50.0	176	45.0	5,931	44.1
国や地方公共団体の薬物乱用対策情報	2,495	14.3	1,024	15.4	630	15.1	10	18.5	78	19.9	2,029	15.1
医療機関や民間支援団体の取り組み情報	2,314	13.2	871	13.1	663	15.9	10	18.5	75	19.2	1,930	14.4
特になし	4,172	23.9	1,820	27.3	796	19.1	14	25.9	107	27.4	2,886	21.5
その他	74	0.4	37	0.6	16	0.4	0	0.0	8	2.0	44	0.3
累計	26,480		10,106		6,679		87		640		20,937	

図表 28 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
体験談	9	心の健康保持のための取り組み	2
薬物に関する情報	5	死亡者数	1
使用者の現状・薬物の影響	4	使用者の周囲の人への影響	1
使用に至るまでの経緯・心理	3	その他	4
売買の現状	3	記載なし	26
罰則・取り締まりの現状	3		

(20) 薬物入手の可能性と可能な理由

問 19(ア) あなたは、これらの薬物入手可能と考えますか。(1つ選択)  
 質問 19(ア)で「難しいが手に入る」または「手に入る」を選択した人だけお答えください。  
 (イ) 入手可能と考えた理由は何ですか。(複数選択可)  
 質問 19(ア)で「それ以外」を選択した人だけお答えください。  
 (ウ) それ以外に入手可能と考えた理由は何ですか。

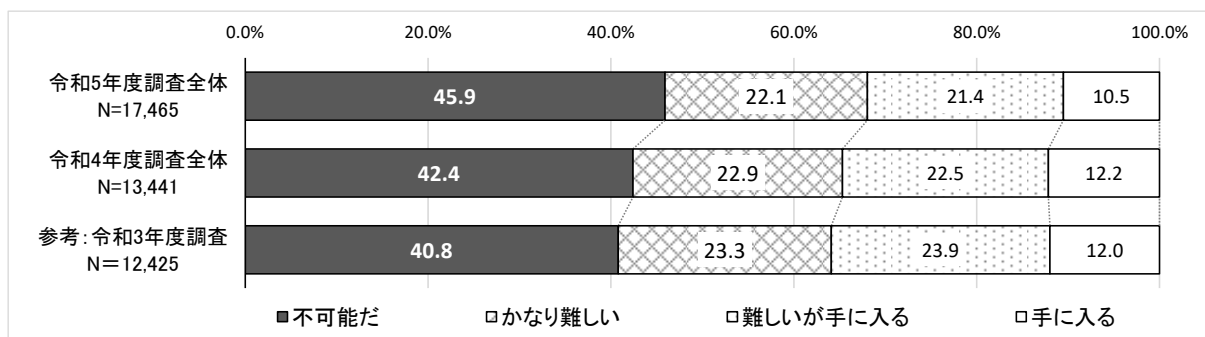
質問 2 で提示した薬物の入手の可能性については、「不可能だ」が 45.9%で最も多く、「かなり難しい」が 22.1%となっている。

68.0%が「難しい（「不可能だ」と「かなり難しい」の合計）」と考えている一方で、「手に入る（「難しいが手に入る」（21.4%）と「手に入る」（10.5%）の合計）」と考えている人は 31.9%である。

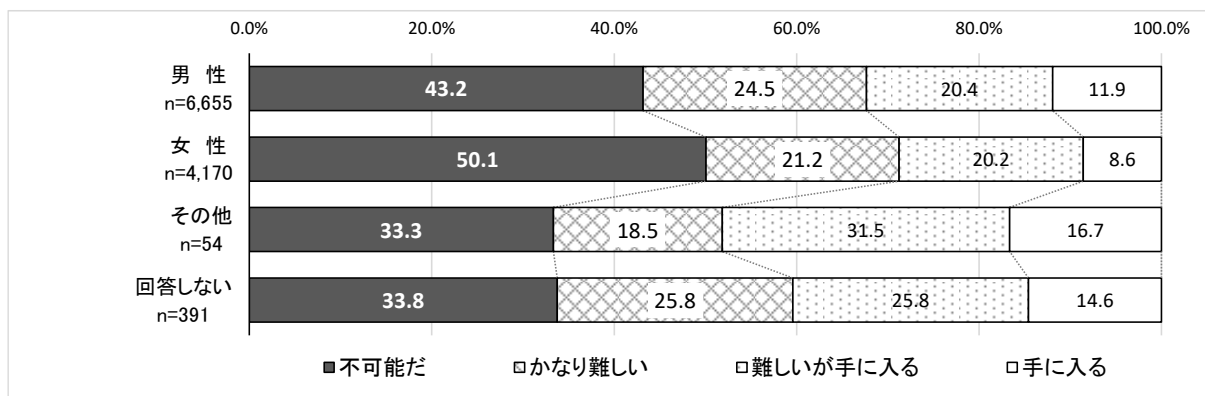
令和 4 年度調査と比較すると、「手に入る」と考えている人の割合がやや減っている。

性別にみると、「不可能だ」とする割合は「女性」が他に比べて多く、「性別無回答」が少ない。「性別無回答」の 40.4%が「手に入る」と考えている。

図表 29 薬物入手の可能性  
 ≪令和 4 年度調査との比較≫



≪性別比較≫

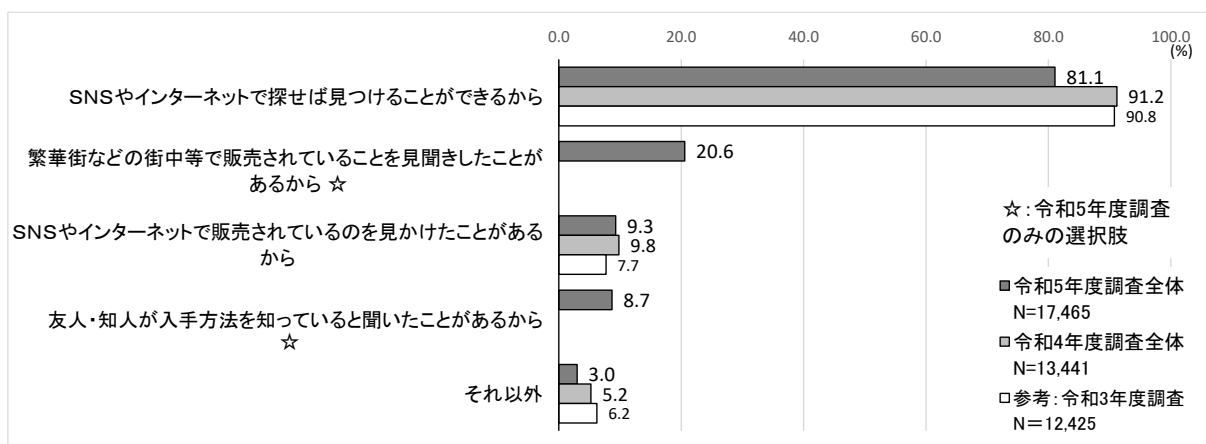


	令和5年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	17,465	100.0	6,655	100.0	4,170	100.0	54	100.0	391	100.0	13,441	100.0
不可能だ	8,018	45.9	2,873	43.2	2,088	50.1	18	33.3	132	33.8	5,700	42.4
かなり難しい	3,867	22.1	1,630	24.5	882	21.2	10	18.5	101	25.8	3,080	22.9
難しいが手に入る	3,745	21.4	1,358	20.4	842	20.2	17	31.5	101	25.8	3,027	22.5
手に入る	1,835	10.5	794	11.9	358	8.6	9	16.7	57	14.6	1,634	12.2

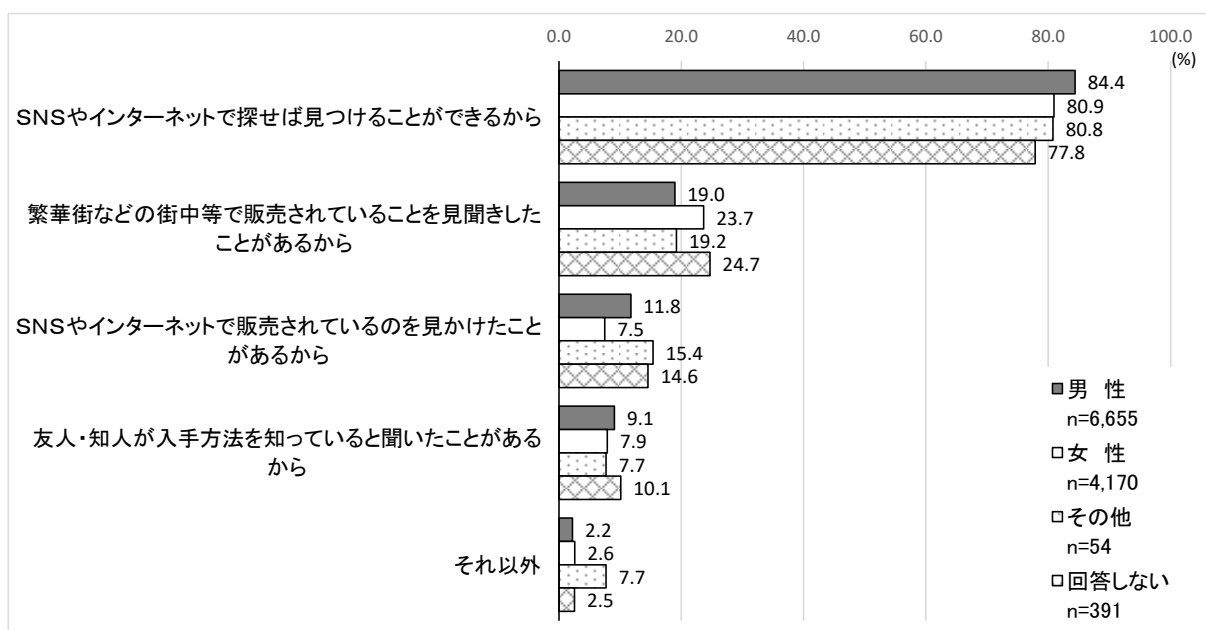
「手に入る（「難しいが手に入る」と「手に入る」の合計）」と考えている人の 81.1%が、「SNS やインターネットで探せば見つけることができるから」を理由としている。「繁華街などの街中等で販売されていることを見聞きしたことがあるから」が 20.6%となっている。

性別にみると、「女性」で、「繁華街などの街中等で販売されていることを見聞きしたことがあるから」が他に比べてやや多く、「SNS やインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから」がやや少ない。

図表 30 薬物入手が可能性と考えた理由  
 ≪令和4年度調査との比較≫



≪性別比較≫



	令和5年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=11,270)								令和4年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	5,580		2,152		1,200		26		158		4,661	
SNSやインターネットで探せば見つけることができるから	4,524	81.1	1,816	84.4	971	80.9	21	80.8	123	77.8	4,251	91.2
SNSやインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから	519	9.3	253	11.8	90	7.5	4	15.4	23	14.6	458	9.8
友人・知人が入手方法を知っていると聞いたことがあるから	484	8.7	195	9.1	95	7.9	2	7.7	16	10.1	選択肢なし	
繁華街などの街中等で販売されていることを見聞きしたことがあるから	1,148	20.6	408	19.0	284	23.7	5	19.2	39	24.7		
それ以外	166	3.0	48	2.2	31	2.6	2	7.7	4	2.5	244	5.2
累計	6,841		2,720		1,471		34		205		4,953	

「それ以外」として記載されている内容では、「実際に使用者がいる・増えている」という事実、また「テレビ等の情報」、「逮捕される人・事件が発生している」という報道があるからとしている。さらに「売人がいる」、「海外で入手できる・持ち込まれる」、などが記載されている。「自作できる」、「知人の実体験」、「持っている人を見た」など、入手できるルートを身近に感じている記載もある。

図表 31 選択肢以外に入手可能と考えた理由の記載主旨

記載の主旨	件数
実際に使用者がいる・増えている	13
テレビ等の情報	12
売人がいる	9
逮捕される人・事件が発生している	9
海外で入手できる・持ち込まれる	7
自作できる	6
知人の実体験	5
そう聞いた	5
授業等で聞いた	4
ダークウェブサイト・SNS	3
身近にあるものもある	2
まちで探せば見つかると思う	2
持っている人を見た	1
次々に開発され、取り締まりが後手になっている	1
その他	1
特になし	5

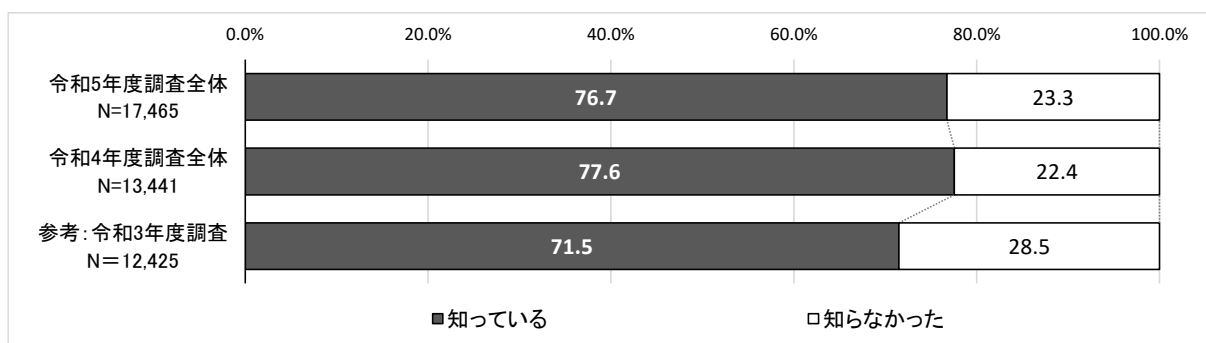
(21) 薬事法の一部改正による処罰の対象拡大の認知状況

問 20 あなたは、薬事法の一部改正（平成 26 年 4 月 1 日施行）により、危険ドラッグと称される薬物や商品（脱法ハーブ、合法アロマリキッドなど）の多くが、使ったり、持っていたりすると罰則の対象となる薬物になっていることを知っていますか。（どちらかを選択）

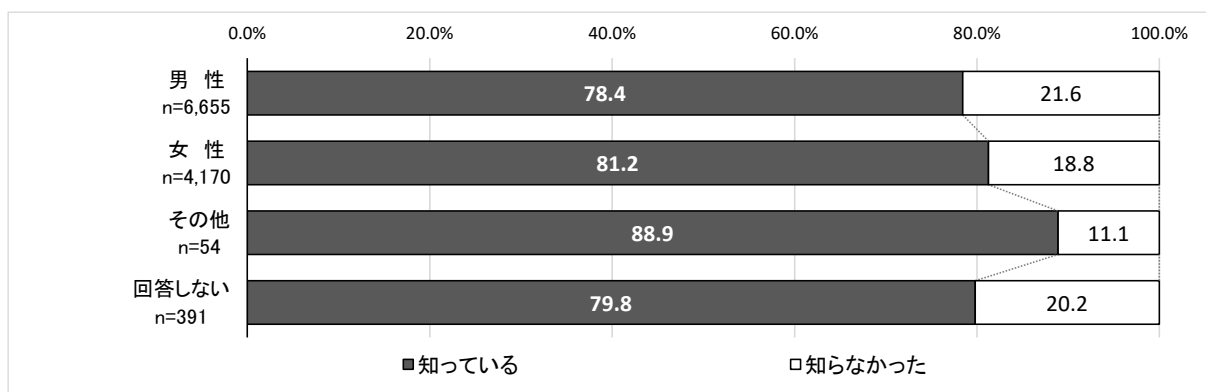
薬事法の一部改正により、平成 26 年 4 月 1 日から危険ドラッグと称される薬物や商品（脱法ハーブ、合法アロマリキッドなど）の多くが、使ったり、持っていたりすると罰則の対象となることの認知状況については、76.7%が「知っている」としているが、23.3%は「知らなかった」としている。

令和 4 年度調査と同様の結果となっている。性別による顕著な差はない。

図表 32 処罰の対象拡大の認知状況  
 ≪令和 4 年度調査との比較≫



≪性別比較≫



	令和5年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=11,270)								令和4年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
回答者数	17,465	100.0	6,655	100.0	4,170	100.0	54	100.0	391	100.0	13,441	100.0
知っている	13,402	76.7	5,219	78.4	3,388	81.2	48	88.9	312	79.8	10,425	77.6
知らなかった	4,063	23.3	1,436	21.6	782	18.8	6	11.1	79	20.2	3,016	22.4

4. 本調査を踏まえた主な意見等と今後の方向性について

(1)大阪府内地域連携プラットフォーム 構成員による意見・提案

組織名	調査に対する意見等	調査を踏まえ今後期待される取組等
1 大阪教育大学	自身が思っている以上に薬物が簡単に手に入ることであったり、また、薬物使用現場に居合わせたことや薬物の使用や購入の勧誘経験がある者も一定数いることが確認でき、薬物が学生たちの身近に忍び寄っていることが確認できた。	薬物に関する情報は授業から得ている者が多いことから、定期的にアップデートされた授業を行い、薬物の取り巻く状況を学ぶ機会を与えることが重要。また、各機関で様々な相談窓口を設けているが、それを知らない者が6割弱とかなり多いことから、授業を通じてそういった情報提供も必要だと感じた。若年時からの不断の啓発活動が大切だと思う。
2 大阪公立大学	簡単に薬物が誰にでも世の中に入っていること、また、その薬物に手を染めたいくなるメンタルに不調をきたしやす現代社会の現状を踏まえ、大学の健康管理センターとしては、日ごろから学生の健康状態を心身共に把握し、フォローし、学生の健康の保持・増進に関与できるような活動を細やかにしていかなければいけないと考える。	・薬物中毒・薬物乱用防止に関する情報発信 ・薬物乱用防止クイズ(大阪府業務課発行)等の活用
3 追手門学院大学	設問(19) 薬物に手を出さないように注意するために知りたい情報に関連し、大学生に対して健康被害の情報を、様々な機会に提供していく必要だと感じた。	
4 大阪医科薬科大学	調査対象が増加しており、昨今のニュース報道等も重なり、学生の薬物への関心は高まっているように感じる。 継続して有意な調査結果を得られるよう、今後も各大学での調査への参加を呼びかけや、その際に学生の目に留まるようなPRが工夫できれば良いと考える。	薬物全般についての継続的な調査の他にも、危険ドラッグや若年層で話題となっているCBD(カンナビジオール)等について、より掘り下げた意識調査を行ってはどうか。
5 大阪経済大学	・「薬物への印象」について、調査の母数が増えた状況において肯定的な回答を選択する者が、わずかな率ではあるが高くなっていることが気がかりである。 ・「使用・所持・譲渡への処罰」について、「罰されることはない」という誤った認識を持っている者がいることも問題である。	薬物に関する啓発で、「中学、高校の授業」を選択した者の率がわずかが低くなってきていることが気に掛かる。「小学校の授業」を選択した者の率はほぼ横ばいであるが、より低学年から薬物の危険性を認識させることが有効だと考える。
6 大阪工業大学	調査・設問内容を吟味して実施願いたい。 日本大学で起こったように、調査して薬物の使用が判明した場合、所轄警察署に報告しないと「犯人隠居」等になる懸念がある。 特に12などの質問においては、目的を明確化した形(例えば啓発のため等)での実施をお願いしたい。	
7 大阪樟蔭女子大学	・入学者数に対しての回答割合を追加した方がいいのではないかと感じた。 ・回答者所属大学が0名となっている大学があったが、本取組が学内で周知されているのか気になった。 ・多くの学生が回答していただく施策が必要だと感じる。例えば、薬物意識調査をどのように実施しているのか、大学での取組事例を共有することで、効果的に実施できるのではないかと考える。	
8 大阪女学院大学	・薬物使用の現場に居合わせたことがある割合が年々増加傾向にあることが気になる。 ・調査時期と対象から、大学入事前の回答者が多数であることから、手に入れるのが悪い意味で簡易になっていると感じている。 ・中学校・高等学校・大学と改めて、薬物についての注意喚起を継続することが重要だと感じている。 ・1年次学生に対して、違法薬物の注意喚起を警察官に依頼して実施している。	・薬物使用の現場に立ち会った際、どのように通報すればよいかをわかりやすく説明することは必要だと感じている。特に若い世代は匿名性の観点で通報した場合の自分自身の取り扱いに不安を感じるのではないと思う。
9 大阪体育大学	ほとんどの回答者が中高の授業等を通して薬物の危険性について学んだ経験がある一方、肯定的な印象を持つ者や、他人の使用には無関心である者が一定数いる状況について、改めて継続的な啓発の必要性を感じた。	各大学が共通で使える啓発動画の作成(元常ユーザーによる実体験や、乱用による健康被害等にフォーカスした、強めの内容のもの)。
10 大阪電気通信大学	薬物について、「1回使うくらいであれば、心や体への害はない」、「ダイエットに効果がある」など、誤った情報を主にインターネット(SNS)から手に入れていると推測できる。 その反面、薬物の害を学ぶ場(学ぶとしたらどこがよいか)もインターネットと回答していることから、教える側がうまくインターネットを活用していくことが大事であると感じた。	薬物に関する啓発が小中高と高いことから、小中高での取り組みを強化し、大学(大学生生活)ではさらに具体的に警察や精神科医による事例紹介をし、よりリアルに知ってもらうのが良いのではないかと。
11 関西大学	大学毎の回答者数に偏りがあるのではないかと考えている。	新入生が意識調査へ回答することによる啓発効果への期待、他大学やメディア等からの調査項目及び取り組みへの社会的関心も高いことから、今後も新入生対象の意識調査を継続していきたいと考えている。
12 近畿大学	薬物使用が違法な事を認識している学生は多いにも関わらず違法薬物所持や乱用のニュースが出てきているのが残念である。	啓発ビデオを作成して新入生に注意喚起を行う等を期待する。
13 摂南大学	本調査については、ほぼ学生の実態が現れているものと考えられる。薬物乱用への問題意識は概ね高く、正しい知識を持っていると認識している。 今後も加盟大学に回答促進の協力をいただくことで、より詳細な実態の把握につなげたい。	「乱用に対して意識を持っている」状態から、さらに「使用の現場に居合わせた場合」どうするかという意識をもたせる取組を期待する。 薬物使用・依存の怖さなどをわかりやすく伝える動画があれば、学生に配信したい。 本学薬学部では、1年生対象に正課の必修科目、3年生対象に正課の選択必修科目で「薬物乱用」に対する知識向上に取り組んでいる。また、新入生ガイダンスにおいて、薬物乱用やSNSを媒体にした犯罪等について、管轄警察署からの講習を実施しており、これらの取組は継続していく。
14 桃山学院大学	初めて結果を拝見したが、薬物に関する学生の実態がよくわかった。ほとんどの方が薬物に対して適切な理解をしているが、数%の回答者が理解できていない状況である。さらなる啓発防止が必要であると感じた。 特にアンケートの中で、10人に一人が薬物を使用する現場を目撃しており、100人に3人が所持・使用者を知っている状況にあるという結果が出ていることが衝撃的であった。また薬物が増加している理由に「友達、仲間、先輩、後輩にすすめられる」が43.7%回答しているということもあり、誤った友好関係の存在を身近に感じている可能性が高い印象を受けた。 大学全体の課題だと思うため、引き続きプラットフォームで協力体制を築いていきたい。	プラットフォーム全体での取り組みを引き続き行っていただきたい。
15 森ノ宮医療大学	性別に関する設問については、各設問で数百人の学生が回答しないを選んでいることから、必要最低限に設定すべきかと思う。	非常に回答率が高い、もしくは回答者数が多い大学についてはどのように学生に協力を仰いでいるのか共有していただけると、全体のNが増えることにつながるのでは。

(2)今後の方向性について

<p>調査の方向性 : ・若者の薬物に対する意識や動向の変化を把握するために、今後も継続して調査を実施する。 ・より多くの大学に協力を仰ぎ、大阪の大学が一体となった取組を目指す。 ・上記にあたり、回答者の多い大学より自大学での取組方法について他大学にも共有していきたい。</p> <p>調査時 : ・アンケートの実施そのものが啓発活動の一環であるため、WEBアンケート実施時に学生に向けた薬物乱用防止に関する情報を提供し、啓発を図る。(継続実施) ・さらに、調査チラシに啓発に関する資料を盛り込むことを検討する。</p> <p>調査を受けた啓発活動 : 薬物使用による健康被害の現状を知り、学生同士が意見交換などを通じて学びを深める機会を提供する。</p> <p>情報の共有方法 : ・大阪府業務課や大阪府警本部との継続的な情報共有を行う。 ・大阪府教育庁等を通じて、大阪府内の高校等にも情報共有を行う。(自県進学率の高い大阪において高次で共通認識をもつことは重要)</p>
---